

「タミル語 = 日本語同系説に 対する批判」を検証する

大 野 晋

大野のタミル語 = 日本語同系説は最初に発表されてから17年が経過した。その展開の跡を今から顧みると三つの段階に分けることができる。

- (1) 第一期. 1980年以後：雑誌「言語」に連載をはじめめる。10回連続。
- (2) 第二期. 1987年以後：『日本語以前』刊。“The Genealogy of the Japanese Language” 発表（「言語研究」95号 日本言語学会 1989）
- (3) 第三期. 1994年以後：『日本語の起源（新版）』刊。

第一期はタミル語という耳馴れない言語が日本語と関係のある言語として日本の社会にはじめて登場した時期である。大野はこの時期に『日本語の成立』『日本語とタミル語』“Sound Correspondences between Tamil and Japanese” (Gakushuin Univ. Series of treatises, 8: 1980) を刊行した。1981年から82年にかけて、大野の研究に対する非難が「週刊文春」に連続的に掲載された。しかしそこに登場せられた方々は、タミル語を全く御存じない方、日本の古代語を御存じない方、比較言語学を御存じない方が大部分を占めていた。

第二期は大野が『日本語以前』（岩波新書）と “The Genealogy of the Japanese Language—Tamil and Japanese” とを発表した時期。この時期に至ると、かなり立ち入った批評が見られるようになった。ドラヴィダ語学の世界屈指の研究者である K. Zvelebil 教授が大野の研究を批評の対象とした。（これについては後に紹介する。）また、現時点のドラヴィダ語学の各部門を批判的に解説し展望した『ドラヴィダ言語学入門』で、Zvelebil は144ページの中の7ページをさいて、“Dravidian and Japanese” という一章を設け、もっぱら大野の研究を紹介し、論評し、自分の見込みを述べた（1990）。

第三期は、大野が『日本語の起源（新版）』を書いた以後である。1. 言語学による比較研究の結果。タミル語 = 日本語同系論の成立。2. それをふまえた考古学的考察。3. 朝鮮語とドラヴィダ語との関係。4. これらを解釈する全体的展望。この書物で大野は、その四つの部分を区別して書いた。この本に対して安本美典・小泉保・松本克己の三氏が「日本語論」1994年11月号に、批判を書いた。今回の国際日本文化研究センターでのシンポジウムは、それに続く大野批判ということになる。

大野は『日本語の起源（新版）』で自分の研究の現在までの到達点をおよそ各方面にわたって概観した。これによって大野説の大体を知ることができる。一方大野は1983年1月から

毎月、160余ヶ月にわたって雑誌「解釈と鑑賞」(至文堂)に一語一語の対応について詳細な比較研究を公表して来た。助詞・助動詞の一語一語についても一語につき十例という多数を列挙し、分析し、動詞の造語法などに見られる対応の存在を詳述した。

以上のような研究の段階に達したので大野は批判に対しての反論を書きはじめ、自分の研究の限界を明確にしたいと考えるようになった。そこで安本美典・小泉保・松本克己三氏の批判に対してそれぞれ反論の文章を公表した。[注1]

今回、長田俊樹、家本太郎、児玉望、山下博司の四氏が大野の研究に批判を加える集会を開き、その後、大野の研究を詳細に吟味せられた上で大野の研究を評価し、新たに論評を公表せられたことに対して深甚の謝意を表明したい。それとともに、四氏が大野の見解を、依然として「撤回させたい」とお考えであるのならば、各氏の論述に対して、必ずしも同一の見解を持ち得ないところがあるので、それを個々に述べて、学界の諸先達、同学の方々の判定を仰ぎたいと考えた。例えば比較言語学そのものについて、またドラヴィダ語と日本語の比較に必要なタミル語・日本語の古代語について、あるいは個々の単語の意味の認定について見解の異なるところがある。よって大野はここにそれらについて述べてみようと思う。だが、大野はここで、ひたすら反論のための反論を繰り返そうとするものではない。

最初のうちはかけ離れた見解を持っていても、言葉を交わして行けば相互の理解は次第に深くなり、見解の相違の生じる根源が明らかにされ、認識や記述の弱点や不正確さが相互に次第に修正されてゆくものである。そうした観点から、よりよい比較研究をめざして大野はこの言葉の交換に参加しようと思う。

1 序(長田俊樹氏の論)

[1] p. (1)―15行目。ドラヴィダ語研究の側から「とくにこれまで全く触れられなかったドラヴィダ語研究者の立場から大野説を検証する。」とある。

前節に記したように、研究の第二期には、すでに Zvelebil が立ち入った批評を書いている。従って「ドラヴィダ語の側から全く触れられなかった」わけではない。チェコの Vacek もまた大野の研究に対して言及している。

Zvelebil は大野の研究に対して「タミル語と日本語、それは関係があるか。大野晋の仮説」という紹介的文章をすでに B. S. O. A. S に書いている(1985年)。だから彼は「再びドラヴィダ語と日本語」と題して、朝日ゼミナールのシンポジウム“日本文化と日本語——南方に源流を探る”(1989年)に寄せた。それは大野の“The Genealogy of the Japanese Language——Tamil and Japanese”(「言語研究」95号。日本言語学会1989)に対する批評である。

それを当日朗読された下宮忠雄教授の翻訳を土台として、以下に引用してみよう。[注2]

「ドラヴィダ語と日本語の系統関係の可能性という驚くべき仮説は、徐々に有力になりつつあるように私には思われます。1987年に出版されたヴァツェック (Vacek)、アシャー (Asher)、サンムガダス (Sanmugadas) らの論文はすべて、極めて慎重な態度を

もってではありますが、その可能性を認める傾向を示しています。」

「私の批判的な、しかし率直に言って明らかに賛成の (sympathetic) コメントを申し上げることになりますが、私も [大野氏と] 同じ順序に従って述べることにいたします。」

Zvelebil 教授は、比較研究では Proto-Dravidian (原始ドラヴィダ語) と古代日本語を対比することが最も望ましいと述べて、

「次善の方法は大野氏が選んだ方法です。それは、テキストおよび碑文 (epigraphy) に保たれている古代タミル語を古代日本語と比較し分析することです。この方法は明らかに、言語のずっと「新しい」段階にしか到達できませんが、仮説的に再構成した形を操作するのではなく、現実の実証されている (古代の) 言語形式を操作するという利点をもっています。」

ついで同教授は大野が Tolkāppiyam (タミル語最古の文法書) を B. C. 3 世紀とするのは古すぎる推測で誤っていると述べ、またカンナダ語などの最古形の時期の推測についても誤っていると指摘した。進んで、論考の中心に入る。

「大野氏の論文の主要部分は比較そのものを扱っています。日本語とタミル語の音体系は、一瞥したところでは、顕著な類似を示していません。しかし音・意味・内的構造において顕著な類似を示す単語の比較をもとにして、母音・子音の対応表を作ることは、明らかに可能です。これは、まさしく大野晋氏が行ったことなのであって、私は、それが有効なものであると信じます。」

「大野氏が39—40頁に掲げている P をふくむ30個の単語のペアに対する唯一の公平な取り扱い方は、歴史的な可能性があるか、このような比較のもつ一般的な「合法性」がありうるかに関するすべての偏見 (肯定的にせよ否定的にせよ) と断定を完全に捨て去って、それらの単語のペアを吟味し、このひとそろいのペアを音韻的・意味的に、対応の有効性の有る無しだけを調べることだと私は確信します。

私は日本語の項目 (item) の正確さを保証することはできません。しかし、それらの項目は大野氏が良心的な正直さをもって選んだものと私は推測します。ドラヴィダ語の項目の正確さについては、私は保証することができます。それらはすべて『ドラヴィダ語語源辞典改訂版』(DEDR) から正確に採られたもので、(若干の場合には) Tamil Lexicon から採られています。」

こう述べて大野が例として取り上げた日本語 f (古くは p) とタミル語の p との比較に踏み入り、「比較されているこの30対の中にはデータに操作を加えたような形跡は一つも見られません」という。「その中でも音と意味の対応が非常に顕著なので、それを偶然と見なすことはできない」ものとして特に次の4例を挙げた。

日本語

タミル語

fat-ake < *pat-akai (畑) paṭ-ukar (DEDR 3856) rice-field (水田・陸田)

fuk-asu < *puk-asu (ふかす) puk-ai < *puk-ay (DEDR 4240) to smoke (けむる)

to vapour (蒸気にあてる)

taf-uru <*tap-uru (死ぬ) tap-u (DEDR 3068) to die, perish (死ぬ、滅びる)
tuf-a <*tup-a (唾) tupp-al (DEDR 3323) saliva, spittle (唾液、つば)

ついで文法研究に対する批評として、次のように指摘した。

「文法的な対応 (pp. 42-48) の中のあるものは、非常に一般的なもので、他の多くの言語や語族にも共通する事柄です。主語＋述語、形容詞＋名詞、副詞＋動詞などの順序や、同様の特徴は他の言語にもあるものです。しかしもっと特殊な共通点もあります。たとえば、関係代名詞はタミル語にも日本語にもありません。ある種の助詞の特殊な配列順序、4系統の指示詞（日本語のいわゆるコソアドの体系、近称－中間称－遠称－疑問・不定）なども両言語に共通しています。ドラヴィダ語の動詞に見られる人称・性・数の接尾辞の使用が後の時代に発達したらしいという大野氏の主張 (p. 44) は正しいです。（日本語はこの特徴を示していません。）」

以上の他にも言及があるが、その後で、同教授はこう書いている。大野は日本語とタミル語との構造的な類似について、もっと踏み込むべきだとして、例文をあげた。

「大野氏はどうして、統辞構造体 (syntactic constructions) の構造的な類似性・同一性をもっと強調しなかったのでしょうか。それは「深層文法」(deep-grammar) の対応を指しているはずです。ここで、清岡栄一の日本語教本 (1953年版, p. 163) から次の一文を取り上げて考えてみましょう。Lafcadio Hearn-wa¹ Nippon-no² koto-wo³ takusan⁴ kaita⁵ hito⁶ de⁷ su⁸ (ラフカディオ・ハーンは日本のことをたくさん書いた人です)。この発話は、構造的な変更をなんら加えずに、一語一語、タミル語に置き換えることができます。Lafcadio Hearn t¹ān¹ Japān²i² poru³lai³ mikavum⁴ e⁵lutiya⁵ manita⁶n⁶ -ē⁷ ā⁸m⁸。もう一例 (大野論文 p. 44): 古代タミル語 entai¹ vantu² uraitta³na³ “my father¹ having come² spoke³”: 日本語 watasi-no titi-ga¹ kite² katatta³ (私の父が来て語った)。」

このように Zvelebil が記述していることは、彼が日本語の文法に接して行ったときに、タミル語との近似をいよいよ実感するからであろう。彼は日本語とタミル語との系統関係の諸相をいくつか模索した後で次のように述べた。

「最後にはほとんど信じられない、しかしまた、ますますまことらしさを帯びてくる系統的關係 (同系性、genetic relationship) の可能性があります。これは日本語とドラヴィダ語に共通の「先祖」あるいは「親」言語 (parent language, 祖語) を仮定することです。祖語の年代と場所は、現在のところ、だれにとっても推測にすぎません。」

「確実な、ゆるがない同系性の証明を樹立するためには、比較歴史言語学の厳格な方法によってチェックされた、さらに多くの言語的証拠が必要でしょう。」

「われわれは、あまり楽観的すぎではありません。日本語とドラヴィダ語の語彙、あるいはその文法構造を一瞥するだけでも、互いに両立しえない非常に多くの特徴が——たぶん、大部分の特徴がそうなのでしょうが——あらわに見えます。」

こう述べたあとで同教授は日本語とタミル語の系統研究には、力と熱意、想像力、大胆さ、忍耐、厳格さが必要であることを指摘して、「仮説を追求することを中断してはなりません

ん。」という言葉で批評を結んでいる。

以上で Zvelebil の論評の紹介を終る。

[2] p. (2)―9 行目。研究と論争の勝敗 長田氏は言う。「誤解を恐れずにいうならば、当日の議論では大野教授に軍配が上がったと認めざるを得ない。しかしながら、それはわれわれ四名が大野説を承認したことを意味しないということを強調しておきたい。大野教授に「日本語＝タミル語同系説」を撤回させることができなかったという意味において敗北したにすぎない。」これと同じ趣旨の記述が p. (4)―18 行目にも見える。「シンポジウムは大野教授の一方的な勝利で終わったが……。」

これによると長田氏は新しい研究を批判して共に真実に近づこうという営為を、大相撲の取組の勝ち負けのように受け取っておいでと見える。私は言語に関する新しい知識を得たときは実にうれしい。自分で見出したときはいうまでもなく、人から教えられたときでも新鮮でかつ楽しい。事実を多くそろえて、そこから推理の筋を導き出し、関係項目がみなその推理の線に収まることを見たときには、心はおのずからやわらぐ。そして一層多くの事実を集めて、その推理のたしかさを検分しなくてはと思う。私のこれまでの経験からいうと、見込みが正しいときには、事実の方でその見込みの線の上に飛び込んでくるものである。「定家仮名遣」の研究のときがそうだった。それがアクセントに関係することに気づいてみると、従来解けずに来た仮名遣の諸問題がその観点からつぎつぎと解けた。こういうことこそ学問の爽快な喜びなので、そのように真実を追求することが研究であるとは私は思っている。勝ちとか負けとか考えたのでは、透明であるべき真実の認識が曇るだろう。

もし長田氏が、どうしても勝ちたいと思うならば、易しい方法がある。大野が挙げている言語学的な証拠、対応語なるものを一つ一つ、これはダメだと証拠をあげて正確につぶして行くことである。これは山下氏についてもいえる。山下氏は16個の単語について実に多くの言葉を使って大野を論難し、その上で53個の実例を疑わしい単語として提示した。しかし、そのうちの何例が実際にダメであったか。山下氏も長田氏も自分のあげた他にもまだまだ誤りがあるとしきりにいわれるが、あるなら実際に示さなくてはならない。はじめから「自分たちは否定的であります」と表明したり、大野の研究を「撤回させることができなかった」とすることは無意味である。誤りの指摘に説得力があれば、大野の研究など、いつの間にか雲散霧消するに相違ない。

否定は具体的で確実でなければならない。否定が合計何個あるか。500例のうち、明らかな間違いがいくつ。否定不能（肯定せざるを得ないもの）がいくつあるのが明示せられるべきである。そうすれば大野は否定された語について大野の持つ材料を提出して一層の理解を求めるだろう。あるいは自分の誤りが認識できれば、その例を撤回するだろう。間違いは訂正するより仕方がない。今回長田氏は具体的に単語6個について異議の申し立てをなした。以下に大野はそれにお答えするつもりである。それを見て第三者が公平に判定して下さるだろう。そのことは山下氏の16個と53個の指摘についても全く同様である。

大野の考えでは、文法形式の対応に加えて、単語の対応が最低350個あればその二つの言語の同系性に関する見込みは取り上げられ、検討に値するものとなると思う。というのはヨ

ヨーロッパで Rask がアイスランドの言語とギリシャ・ラテン語などとの間の同系説を提起したときには352個の単語の対応を示した。ヨーロッパの言語学者は352語では少ないなどといわずに、それを見て比較言語学の研究をはじめ、約100年かかってインド-ヨーロッパ語族というグループを確立した。だから350という単語の数は一つの目安となるだろう。

今回の四氏の批判を見ると四人のうち三人の方は古典タミル語を扱ったことがないとお見受けした。山下氏は氏の論文で「問題の語と語義」という一項を設けて53個の単語を列挙している。その全部が実際に間違いであったとしても、大野の挙例の約一割にすぎない。しかもその中には paṭukar (畑) がある。それは、この論文の(3)ページに挙げたように、Zvelebil が「その中でも音と意味の対応が非常に顕著なので、それを偶然と見なすことはできない」とした4個の単語の一つである。このことは山下氏の指摘が必ずしも妥当なものかどうか再考の余地があることを示唆している。実際に大野はこの論文の(46)ページ以下に山下氏のあげた16語及び53語について個々に「大野の資料・根拠」を提出しようと思う。

[3] p. (2)―17行目。タミル語伝播説 長田氏は言う。「とくに紀元前7世紀―2世紀にかけて、タミル人が直接日本へやって来てタミル語を伝えたとする「タミル語伝播説」については、考古学や形質人類学の立場からまったく可能性がない。」この発言については、大野は次の見解を持っている。まず大野は『日本語の起源 (新版)』に示したように、研究を次の三つの段階に分けている。

1. 純粹に比較言語学の問題。その手法は“音韻の対応”を用いて、タミル語と日本語との同系を立証することである。これが第一の段階。ただこの“音韻の対応”による同系の証明は、証明が成立したとしても、その同系成立の「時」を決定することはできない。同系性がいつ成立したのかは「対応」を用いたのでは立証できない。つまり同系ということが分っても、その段階では、いつ、どうやってタミル語と日本語の祖先が共通になったのかという歴史的説明は不可能なのである。
2. そこで第二段階の研究作業に入る。大野は歴史的な手法を導入した。歴史学とは常に時間の要素を考慮に加える学問である。

それには二つの道がある。その一つは対応する単語の内容を吟味すること。その二つは直接相互の考古学的遺物を比較することである。そこでまず第一に対応語の中味を点検する。すると、稲作に密接な関係のある単語が数多くある。コメ(米)・クマ(神米)・アハ(粟)・イネ(稲)・アゼ(畦)・クロ(畦)・ハタケ(畑)・タンボ(田ンボ)・ツク(春ク)・カユ(粥)・モチ(餅)その他合計二十数語がある。また金属に関係する語としてはカネ(金)・タカラ(宝)がある。機織に関係するハタ(布)・カセ(帛)・オル(織ル)・シツ(倭文織)などがタミル語に対応語として存在する。では、これらの稲作・金属・機織に関係する単語は「いつ」から日本に存在したかというように考察をすすめる。

これらの単語が、その指示する実物なしに存在し、流布することは考えられない。これらの単語の存在は、これらの指すモノあるいは動作と同時にあるはずと推測される。つまりこの三種の文明的事実が日本に生じたのと同時またはそれ以後に、

これらの単語は日本に存在し得た。ところがこの文明的な物や動作は考古学によって日本では弥生時代以後に存在したと証明されている。だから、これらの単語もその時代から後に日本語に存在するもので、それ以前ではあり得ないことが分る。

このことは日本語とタミル語の関係が B. C. 6000年とか B. C. 7000年とかいうような非常に古い時代（つまり縄文時代前期より以前）に生じたものではなく、弥生時代に生じたのだと考えざるを得ないという推論を導く。つまりタミル語と日本語とが関係を生じたのは今からおよそ2500年前のことだと見なくてはならない。

例として用いる500の対応語の中には人体語、自然物の語などがある。これは系統研究それ自身のためには必要な単語である。しかし、年代を推定しようとするときには材料にならない。身体や自然物は、人間ならば、あるいは地球上ならば、どこでもいつでも存在するはずのものだからである。文化語、文明語は借入れの可能性があるので、言語の系統の研究では低い価値しか与えられないものなのだが、二つの言語の交渉・関係の年代推定には役立つものである。

そのように考察を進めてくると、一般的に言語学者たちは、「考古学は自分の領域外だ。そんなものを取り込むのは学問の純粋性の浸潤だ」というような判断に陥るように見受けられる。言語学者には、文化とか文明とかを埒外として平素関心を払わないひとが多い。

第二の道は、もっぱら考古学によって、日本と南インドとの考古学的事実を直接比較することである。これは言語学そのものではない。全然別の学問である。しかし、比較語彙として取り上げられる単語の指すハタケとか、カネとかハタとかいう事実・実物を考察するためには、必要となる。いわゆる言語学者は、ここに踏み込まない。ここまで入りこみ、考古学に手を染めるので、言語学者は、大野の説を混乱と受け取る。しかしながら大野自身は、言語学的証明の代わりに、考古学を使うような、方法上の混乱を全然していない。それは別のものである。

南インドの文明史では、B. C. 1000年—A. D. 300年を Megalithic Culture (巨石文化) の期間としている。日本では B. C. 500年—A. D. 300年を弥生時代としている。両時代はその中心的時期が重なっている。そこで両文化を直接的に比較してみる。ことに北九州を中心に考えると、1. 稲作が共通。2. 墓制に共通がある（支石墓・カメ棺墓・箱式石棺墓など）。3. 金属の使用が共通。4. 北九州に機織の器具の断片が見つかるなど機織の共通がある。つまり、考古学的な対象となるものの単語の対応だけがあるのではなく、その事物そのものにも共通がある。

また南インドで Graffiti と呼ばれている土器の表面の記号は、日本では記号文と呼ばれるが、全く同形のものが極めて多数、何百と共通に存在している。これは近畿地方（大阪・奈良）に多いが、九州から関東に至るまで多数発見されている。

弥生時代の実態は何かという問題については、考古学界の研究者が長年にわたって営々と努力せられた結果が多数公けにされている。それは日本の歴史的発展を知る上で極めて重要な役割を果す尊敬すべき資料である。大野はこれらの成果を、南インドの Megalithic Cul-

ture の文明的事実と比較することを試みた。その結果、考古学の素人としてはその両者は極めて類似の度が高く、何らかの系統的な関係があると見ざるを得ないという結論に達した。

そこでインド側から著名な Gururaja Rao, Nagaraja Rao の両教授、またスリランカの学者 Ragupathy 博士を招待して、それぞれ北九州、奈良、大阪を見学する機会を作った。彼らはみな双方の類似の大きいことに驚いた。また Ragupathy 氏の指摘によって南インドの Graffiti と藤田三郎氏の資料による日本の弥生時代の記号文との顕著な類似が知られた。日本側からも橿原考古学研究所長の樋口隆康氏、熊本大学の白木原和美教授らが南インドを訪れたりしている。

しかし日本の考古学者で、日本の弥生時代を専門とし、兼ねて南インドの Megalithic Age を深く研究している人は未だないらしい。大野は専門の研究者が、専門家の目で南インドの巨石時代の文明と、日本の弥生時代のそれとを比較して下さることを心から希望している。

3. 第三の段階として、以上の言語学的事実と考古学的事実を総合する。さらに朝鮮語の単語がタミル語、カンナダ語に多数対応することを考慮に加えて、全体的展望を明らかにする。

ここまでの記述によって、長田氏の見解に対する大野の意見は、おのずから明らかになるだろう。つまり、時間としては B. C. 1000年から A. D. 300年、場所としては南インドという時と場所の、つまり Megalithic Culture の時期の文明は日本の考古学界に未だ一般的には本格的に知られていない。それ故、現在の時点では日本考古学は大野の見解に対して肯定も否定もできないはずである。大野が提出した考古学的資料そのものを、まだ少ないということではできても例えば Graffiti や箱式石棺のごときは否定することは不可能と思う。

大野にとって考古学的側面は、言語学的考察の結果到達した言語の同系性が、いつ、いかにして成立したかを解釈するための材料である。大野は言語学的結論と、考古学的成果とを混同してはならないと考えている。『日本語の起源（新版）』の記述が第一章同系語の存在。第二章対応語と物の世界。第三章対応語と精神の世界。第四章南インドの言語・文明と日本・朝鮮。このように、明確に区別してあることは、そうした大野の考え方の表明であることを読み取って頂きたい。

いずれにせよ、第二段階の研究、つまり考古学にからまる事実の究明は未だ十分になされていないのだから、その結論は、現在のところいくつかの選択肢の中の一つであるにすぎない。第一の言語的同系性の証明の確実さとは扱いが全く異なるべきものである。

ただし、大野は本来、「日本語の系統」を言語学者諸氏がなさるように、ただ音韻・文法・語彙と限定して考えては来なかった。言語は生活している人間が話すものである。大野の本来の問いが「日本とは何なのか」という点にあるから、大野は常に言語を生活や文化と考え合わせて来た。『日本語の起源（旧版）』で示したように、今から40年前にすでに、言語を考えるときに文化人類学、考古学に目を配っている。言語と文化と人種とを分けて考えよ、混同してはならぬという言語学の教えは正しい。しかし、それは言語と文化・文明が関係ないということを意味するものではない。ところがそれをとりちがえてか言語学者諸氏は、ほ

とんど文化・文明について考慮をはらわない。一方考古学者、文化人類学者の側では、言語学のイロハも御存じない方が大部分を占めている。

従って大野の書物を見ると、「言語学」と「考古学・文化人類学」とが混乱しているとお読みになる。大野自身としては明確に区別しており、ことに南インド関係については前記のように区別して書いている。

長田氏は大野が新しく提出した Graffiti の共通、墓制の共通、その他『日本語の起源（新版）』に大野が提出した考古学的事実をどう評価するのかを個々に明示して頂きたい。日本を訪れて北九州の弥生文化の遺跡・出土品を見たインド側の考古学者はその共通に驚いて、すでに「考古学的な系統的關係」を見込んでおり、G. Rao は檀原考古学研究所でその見解を公けにする講演をした。南インドの材料を欠いたままの、従来通りの日本考古学の材料だけで、日本と南インドの間に関係が見つからないのは、当り前のことに属する。

〔4〕p. (2)―24行目。タミル語と日本語の文法範疇 長田氏は言われる。「とくに、すでにドラヴィダ言語学でコンセンサスを得られた術語や文法範疇を無視して、日本語の記述に使われる助詞や助動詞といった用語を使用すると、タミル語の接辞や連続動詞とは概念上、かならずしも一致しないことを指摘した。」

今まで何の関係も想定されずに経過して来た二つの言語の比較であるから、その文法把握にもいろいろの相違があるのは当然である。また、ドラヴィダ言語学の術語を大切にしようとなさる気持は分らないではないが、しかし、現在のドラヴィダ語の文法で使っている概念がドラヴィダ語の文法的特質をよく把握しているか否かは根本的に疑問とした方がよいと思う。何故なら、ドラヴィダ語の文法研究について近代に至って最も早く手をつけた言語学者は、文法体系の全然異なるヨーロッパ語育ちの人たちだった。従ってヨーロッパ語の文法範疇でなるべく分析しようとする。その結果が、異質の文法体系をもつドラヴィダ語を、的確にとらえ得ているか否かは用心してかからなければならない。このことをいうのは日本語の文法が明治時代以来、英文法、ドイツ文法の概念で分析されて、それが支配的である結果、日本語にあってドイツ語などには見られない事実が、日本語の文法体系から脱落していたり、誤った枠組みに入れられたりして、日本語の事実が日本人自身にもよく理解できなくなっている例があるからである。そうした事実を見ているから、現在支配的であるドラヴィダ語文法を鵜呑みにすることには、大野はあまり賛成でない。

タミル語最古の文法書である *Tolkāppiyam* の品詞分類では単語を四分している。これは日本語について、江戸時代中期に富士谷成章が日本語の単語を分類したときの四つと、数も同じで、それぞれの中味もほぼ同一である。タミル語と日本語との間でそうした一致が見られることは、この二つの言語が構造的に極めて近似しているからである。勿論、タミル語と日本語との間には、人称語尾の有無などの相違もある（しかし人称語尾はタミル語と同型のものが日本語の佐賀方言などにもある。逆に、タミル語から9世紀10世紀ごろ分離したとされるマラヤラム語には人称語尾はない）。そうした事実があるから大野は、サンガムの歌（B. C. 200—A. D. 200）を読むときに、実は、極端な言い方をすれば、日本語の文法で押して行って読んでいる。日本語の文法の構造を知るものは、タミル語の文の構造が“基本的

に” 同一であることをたやすく理解する。だから日本語の古典文法の考え方でタミル語が読める。

「行カセラレナイデショウカ」という文を英語に訳せといわれたとき、おそらくすべての日本人はとまどいを感じるだろう。それは英語と日本語の文法構造が極端にちがうからである。ところがこの複雑な構造の文が、タミル語では全く同じ順序で置きかえられる。

行カ¹ セ² ラレ³ ナイ⁴ デショウ⁵ カ⁶
 naṭa¹- tta²- ppaṭṭi³- anr⁴- um⁵- kollō⁶.

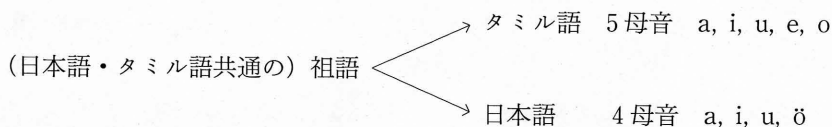
すでに見たように Zvelebil も文例をあげて日本語とタミル語の文構造が一致することを示したが、こうした文法の一致の事実を重く見ずに、一致するそれぞれを何という術語で呼んでいるか、命名の仕方が違ふととがめ立てして、両者の文法的不一致が大きいかのように強調するのは妥当を欠く。

[5] p. (2)―28行目。古代日本語の音韻体系 ここで長田氏は、児玉氏の質問に対する大野の回答が「がっかりさせられるものであった」と述べている。実際は、どういうやり取りがあったのか、問題は何かだったのか。記述を(1)(2)(3)(4)(5)に区別する。

(1) 問題はこういうことだった。大野の母音対応表を見ると、タミル語の u は日本語の u, ö という二つの母音に対応するとされている。音韻の対応は1:1であるべきだから、1:2となっていることには何らかの理由があるはずである。その説明が知りたい。

(2) これに対して質問者である児玉氏は一つの答えを持っていた。

日本語とタミル語が同系であるとした場合、共通の祖先があるはずである。比較言語学の一つの教則に従えば、次のような想定がなされる。



タミル語の5母音 a, i, u, e, o のうち、u が日本語では u と ö となっている。日本語の u, ö が古い形を残したものであれば、タミル語の u は、もとは u, ö の二つだったことになる。それが融合して u 一つになったとすれば、タミル語は大昔には6母音だったと考えなければならない。しかし、全ドラヴィダ語を通じて、6母音の言語は存在しない。だからその融合という考えは成り立たない。では次にタミル語の u が日本語に入ってから u, ö に分裂したとするならば、それは何故か、いかにしてか、の説明が必要である。その説明はどこにも見えない。だから大野の母音対応はおかしいものだ。これが児玉氏の考えであり、主張だった。長田氏はこの融合か分裂かという問いかけを強調し、「(大野の) ことばにいつわりがないのなら、大野教授は比較言語学を知らないといってよいし、わかったうえで、知らぬ存ぜぬをきめこんでいるとしたら、こうした討論をする意味はほとんどない。融合や分裂について、大野教授の説明が待たれるところである。」と述べている。

(3) 当日の録音テープにも入っているように、大野は次のように答えた。

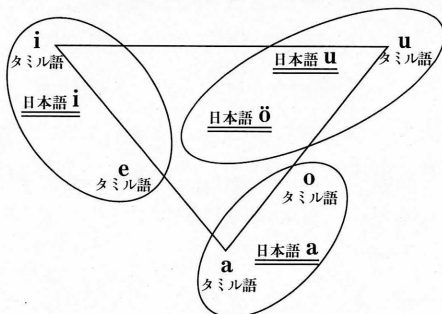
8世紀の日本語の母音は8個あるとされている(橋本進吉先生の研究)。その中味を詳しく調べると、④ a, i, u, ö の群、⑤ e, ë, i, o の群の二つが区別できる。④は母音全体

の85%の使用率を占め、語根の母音となる。⑤は15%の使用率を占め、語根の母音となることはほとんどなく、語の末尾の部分に現われる。よって④が古い根幹の母音で、⑤は新しい合成母音と推定される。それ故、古代日本語の外国語との比較研究においては④が主役を演じるはずである（これは大野が何十年前に見出したことであり、すでにそれは書いてもいる）。

タミル語の5母音と日本語の4母音を比較する場合に、それを実際に検討してみると次の対応表を得る。

タミル語		日本語
a	——	a
i	——	i
u	——	u
e	——	i
o	——	a
u	——	ö

古代のタミル語・日本語の母音の対応



つまり、タミル語の a, i, u はそのまま日本語の a, i, u にそれぞれ対応した。しかしタミル語の e と o については、日本語の a, i, u, ö という体系の中にはぴったり当る相手がいない。そこで e は聴いて近くきこえる i と対応した。o は聴いて近くきこえる a と対応することになった。ところが日本語の ö が問題である。ö はタミル語の a, i, u, e, o という体系の中にはぴったり合う相手がいない。つまり日本語の ö はアキマになったというか、余ったというか相手なしという状態になったわけである。そこで ö は聴いて近い u の音と組む以外なくなり、u—ö という対応をつくった。その結果、1:2 の関係、タミル語 u—日本語 u, ö という関係が成立したと考えられる。これが大野の考えである。大野は白板を使ってこれを説明した。

すでに述べたように児玉氏は、日本語とタミル語の共通基語があり、そこから二つの言語が分岐して来たと想定している。しかし、大野はタミル語と日本語とが数千年も前に分離したとは考えず、B. C. 500年ごろ、それ以前から日本にあった言語の上にタミル語がかぶさって日本語が成立したと考えて来た。その考え方の相違がこの母音の問題の解釈の相違をもたらした（このシンポジウムで初めて公表したこの u, ö の母音についての考えを大野は1996年4月号の「解釈と鑑賞」に活字化した）。母音 u をめぐる質問と答えは以上で終りである。

(4) 大野は当日「母音の対応が実際に生じているのだからまずその事実を確認すること」と言った。その大野の発言の背後には次のような考えがある。

新しい研究を進めて行くときには、急には解けない問題がつつぎつつぎに出てくるものである。タミル語と日本語の比較においても事は同様である。母音の比較については、a~a, i~i, e~i, o~a と綺麗な対応が成立して、母音の対応の85%はここに含まれた。そこにたまたま u~u, ö という現象が見出された。

音韻の問題では8割9割が規則的に成立する原則は、例外として残ったものについて丁寧に調べると、それぞれ理由が見つかり、全体として成立するものだという経験則を大野は持

っている。金田一春彦氏もアクセントについてそのようなことを述べられたことがある。だから例外については丁寧に考えればよいのである。長田氏は「このことばにいつわりがないならば」とか、「知らぬ存ぜぬをきめこんでいるとしたら」とか書いておいでになる。それで分るとおり、児玉氏、長田氏はこれこそ大野説の弱点と見たのだろう。

しかしこの母音の問題は、タミル語の a, i, e, o の四つについては対応が成立している。だから長田氏、児玉氏はまず第一にその85%の事実を認めるべきなのである。しかし、そのことを見送って触れずに、残りの15%の事実によって全体を否定なさろうとしている。事実をよく見れば、u~ü の対応は50個以上例があり、u~ö の対応も30個以上の例が存在する。これは単なる偶然とはいえない。こういうときには、何か理由があるものである。だから大野は以前からこの問題を考察し、到達した考えを長年温めて繰返し吟味して来た。まず「存在する事実は事実として重んじること」という鉄則がある。それを長田氏、児玉氏は、自分の思い込みによっては簡単には解けなかったところを取り上げて「解けないではないか」とそこだけを強調せられる。

(5) このやりとりによって判った事柄

少し重要と思われることがある。(3)で大野が書いたことは、当日も説明したことである。しかしお二人の文章にはそれについて何も書いてない。今回の児玉氏の文章にはあっさりと「日本語に4母音が想定されているが」と書いてある。「④の4母音だけが古代の日本語の本来の母音だ」という見解はタミル語と出会う以前に、万葉集の何万という音節を整理して導き出した大野の見解である。それがタミル語の出現に当たって、母音の対応図を作ったときに生きて来た。4母音という予想の通りで綺麗に説明がつく。そこに u~ü, u~ö の問題が浮き上がって来た。それについて、長い間温めて来た大野の答えをはじめて当日説明している途中で、聴いているお二人の様子から大野は感ぜざるを得なかった：この方々は日本語の比較言語学に必要な、古代日本語の音韻について御存じない——ないといったら失礼とすれば——極めて少ない知識をお持ちであるなど。これでは話は分らないなど。大野の長い発言について、二人が何もお書きにならないのは、やはり、そうしたことだったと今にして思う。以上が母音の対応についての両氏の発言に対する大野の見解である。

[6] p. (3)—10行目。Tamil Lexicon についての認識 長田氏は言われる。「大野教授が引用した『タミル語大辞典』についても、その意味が古いものから新しいものへと並んでいるにもかかわらず、意味をアトランダムに選んで、日本語と対応させている。」

Tamil Lexicon (以下 TL と略記する) の意味記述が古いものから新しいものへとすべて整理されて並んでいたなら比較研究はずい分便益をうけただろう。1981年に Madurai で開かれた世界タミル学会でたまたま会ったアメリカの学者は、TL の Reprint を希望するといひながら「その意味記述は historical でないから使いにくい」と言った。それを Kothandaraman 教授に話したところ、「タミル語にはまだ十分な concordance がないし、まして1920年代には用意が不足だったのです。TL には Sangam の単語も半分くらいしか収められていない」と元気がなかった。大野は日本語の古典語の辞書を制作したことがあり、現在も古語辞典の編集にかかわっているのだから、語根の意義素を確定しようという努力は人一倍して

来たし、現在もその願望を強く持っている。従ってタミル語の「大きい単語」(用例も多く、意味も広く、長い年代にわたって使われる単語)に対すると、これの根源的意味は何だろうかかと自然に追求する習癖をもっている。だから TL の一つの単語につけられた10個あるいは15個の訳語を見るときには、その最も古い意味または根源的意味は何だろうか、自然に頭を働かせる。しかし、TL には全体として何が根源的意味なのか把握できない記述が多くある。山下氏が TL にすべて秩序ある意味記述を見出しておられるとすれば、それは奇異である(このことについては先に行って具体例をもって触れる)。

TL の意味記述が十分整っていないから、大野は、単語の単純な引き合わせを避けて、タミルの古典文学に用例を求め、その文脈と日本語の用例の文脈を引き合わせて示すことに努めている。その作業の結果は14年にわたって「解釈と鑑賞」に連載している。シンポジウムの参加者に前以てお配りした「対応語一覧表」はいわばその記述のインデクスにすぎない。もし一覧表の対応に不審を感じられる向きは「解釈と鑑賞」誌にその詳しい説明を求めるのが順である。しかしシンポジウムの当日も、また後日に至っても、大野説を撤回させると意気込んでも、雑誌に載せた一語一語の解釈を御覧になったらしくは見えない。

たとえばいくつかの助詞、ē とか tān とか um とかなどには、数十例の文例をあげ、それに対訳をつけ、いかにタミル語の古代の助詞と日本語の古代の助詞が「畏るべく」対応するかを大野はそこに記している。その記述をするには、古代日本語の助詞について、いちいち検討を加え、その特性を見抜き、さらにそれをグループ分けして、用法上の共通と差異を把握した上で大野は使っている。のみならず、相手のタミル語の古典の助詞の用例を、協力者 Sanmugadas 教授夫妻とともに何十、何百と集めて研究している。そうした用意を長田氏、山下氏はどの程度持った上で発言されているだろうか。

[7] p. (3)―14行目。両言語の相違点 「相違点について、『日本語とタミル語がそれぞれ異なった歴史を持つ以上、相違点があるのはあたりまえであって、相違点を問題にしてもはじまらないし、500 の対応語こそが同系語の証拠となるのだから、そちらを問題とすべきである』と述べ、相違点はまったく問題にならないことを強調した。」とある。

上の文章の中に二重鉤括弧でくくった部分がおよそ大野の発言である。当日の批評では、……こういう相違がある、……こういう相違があると、相違点を次々にあげるばかりで、こちらが同系の材料として持ち出しているものの妥当・不妥当に触れずに、相違点があるから間違っているという発言が大部分だった。そこで大野は述べた。比較言語学では、相当数の単語、また文法形式、それに使われる形態素 (morpheme) の対応を必要とする。それが成立すれば、次第に細かいところに踏み込んでいく。そこに至ってから、相違の原因・理由をこまかく考察する。しかし二つの言語が同系であるとは二つの言語がすべて一致するというのではない。相違が多々あるのは当然で、大切な点に対応があるかどうかを見ることが肝腎である。研究は大筋を確立して、次に細かいところに進む。そうした研究の進展、手順とことがある。

フランス語とドイツ語とを比較すれば、違うところばかりといってよいかもしれない。しかしラテン語にさかのぼり、ゴート語にさかのぼりして、対応を求めると、数々の対応が増

加してくる。それによって、これらはインド-ヨーロッパ語族の仲間であることが一層明確になる。しかし相違点をあげて行けばまた限りなくあるだろう。それと同じである。「相違点はまったく問題にならない」とあるが、それは不正確で、これは「相違点だけ取り出しても問題にならない」ということである。まず500語の対応の存在と助詞・助動詞の対応の中のいくつを確実に否定できるのか、それは全体の何パーセントになるのかを大野としてはおたずねしたいと思っている。

[8] p. (3)―32行目。理解と譲歩 「大野教授が比較的好意的に答えたのは、山下氏の指摘に対してである。大野説のなかで中心をなす、日本語の助詞と対応するとみなすタミル語の例への山下氏の疑問に答えて、たしかに大野教授のタミル語インフォーマントもすべてに同意していないことを大野教授自身が認めたのである。シンポジウム参加者が指摘した疑問点に対する、大野教授の唯一の譲歩がこの一点であった。」とある。

ここで「大野教授のタミル語インフォーマントもすべてに同意していないこと」と記されているが、それはどんなことかを書いておこう。

名詞・動詞・副詞・形容詞などの意味を研究しているうちは、タミル語の先生に対して大野はもっぱら聴き役で、それをTLにたしかめるくらいのことであった。ところが助詞・助動詞にくると、次第に様子が変わって来た。ドラヴィダ語学界でなされている古典タミル語の助詞・助動詞の意味や用法についての研究は、大野の印象を率直に言えば、日本の江戸時代の本居宣長・富士谷成章以前の状態といえそうである。タミル語には紀元前に書かれたという詳細な文法書 Tolkāppiyam があり、高い価値が与えられている。Sanmugadas 教授も夫人も Tolkāppiyam を読み、かつ正確に記憶している。「そういうことは Tolkāppiyam に書いてない」とよくいう。しかし、そこで止っている感じがある。助詞・助動詞については全体として日本語の側の方が研究者も多く詳細な研究が進んでいる。それには「万葉集総索引」以下100冊にあまる古典文学の総索引が日本では揃っていて、用例の有無などすぐさま判明するといった事情も関係がある。助詞・助動詞については Sangam 全部について完備した索引はない。

例えばタミル語の kol と ē という助詞は共に疑問を表わすという。kol は日本語の助詞 ka (カ) に対応し、ē は ya (ヤ) に対応する。kol は「疑問に思う、何も分らない」とする役目を持つ。ところが日本語のヤの用法から見て ē は単に疑問を抱くのではなく、「相手に自分の判断をつきつけて問いたす役をする」のではないかと大野は推測した。大野が「日本語の文法」で押すとはこのことである。日本語のカとヤとには、単純な疑問のカと、相手に自分の意向、判断をつきつけて問いたすヤとの相違がある。その点がその二つの助詞の特質であり、相違でもあると大野は見ているから、そういう差が、タミル語の kol と ē との間にもあるかという発想である。二週間もたつと、「多くの例を集めてみると、先生のいうことは当たっている」ということになった。

こんな例もある。助詞の akam は TL に A particle of locative ending とある。そして akam は名詞として inside (内部) という訳語を持っている。それを見て大野は、akam は日本語の助詞 ga に対応するのではないかと見当をつけた。何故なら助詞ガは本来自分、親、

夫、妻、恋人など、内部扱いの者の下につく助詞だからである。akam は日本語のガのように名詞と名詞との間に入る。そこで Sanmugadas 教授夫妻と共に名詞の akam を含めた80例ほどを古典から探し出し、意味を分析する。その結果、助詞 akam は日本語のガと平行する用法をほとんどすべて持っていることが判明した。はじめは Sanmugadas 教授も夫人もその解釈に賛成でなかった。しかし、例が多数になるにつれて、とうとう日本語のガとタミル語の akam との用法の平行を認めるに至った。来訪した Kothandaraman 教授もはじめは難色を示して akam は locative ending だと主張せられた。しかし数多くの例を出すついでに諒解された。このような次第だから、助詞 akam に関する大野の見解はドラヴィダ言語学界の認知をうけるには時間がかかるだろうと思っている。

助詞 vāy については、TL に A sign of the locative case (場所格のしるし) とある。大野はこれが日本語のハに対応するのではないかと考えた。助詞ハは「場 (バ)」と結びつくところがあるから、ハを locative (場所格) と見ることはできなくはない。例によって用例を集める作業をして分析した。その結果を Kothandaraman 教授に説明したが、教授は locative と思うという意見だった。こういう場合は宿題である。大野はその後、協力者と共に改めて vāy の例を集めて分析し、その結果を「解釈と鑑賞」773号、774号 (1995年10月号、11月号) に発表した。ここには紙面がないからそれを御覧いただきたい。

終助詞の man などは、「虚辞」(意味を持たない言葉) (an expletive) だと TL にある。しかし多数の例を集めてその用例を吟味すると、文末にcoming しているものは、日本語の「悲シキモノヲ」の mönō とぴったり同じに使う。man は日本語の終助詞 mönō と音韻の上で対応している上、用法から見て mönō と全く同じに解釈される。だから man は決して expletive (虚辞) などではない。しかしタミル古典文学の研究の世界では、man は「虚辞」だとするのが何百年来の伝統的解釈だとのこと。大野の見解は当分インドでは認められないだろうと Sanmugadas 教授は笑った (後日、Kothandaraman 教授は大野の見解を認めた)。

以上のようなことが、タミル語の先生と、生徒である大野とのやりとりである。長田氏はここで「譲歩」という単語をお使いになったが、研究は商業におけるような「交渉」ではない。真実を知りたいという願望にもとづく営為である。「正しい」か「間違っている」か、あるいは「現在のところは不明だ」という三つがあるだけだと思う。

[9] p. (4)―6 行目。身体語と文化語との価値 長田氏は言う。「たしかにわれわれが学生に対して説くのは言語学の自立性である。しかし、こうした自立性を比較言語学の立場で堅持しようとするならば、身体部位名など文化や自然環境の影響を受けにくい語彙を選んで対応語を提示するのが常識である。」

言語学が言語の系統研究の自主性を保つためには、文化語を使わずに身体部位名などを使うべきだということである。つまり「言語そのもの」の研究に、「文明」を持ち込むなという。それは妥当な見解である。それだけに、長田氏のこの発言を聞く方は、大野があたかも文化語、文明語だけによって系統論を組み立てているかのようにとられるかもしれない。しかし例の 500 語の表には次のような身体語が含まれている。

日本語	タミル語
fa (歯)	pal (tooth) 歯。DEDR3986
tuf-a (唾)	tupp-al (saliva) 唾。DEDR3323
ta > te (手)	tōl (arm, shoulder) 腕・肩。DEDR3564
as-i (足)	aṭ-i (foot) 足。DEDR72 (ṭ/s)
sō > se (背)	cu-val (back) 背。DEDR2696
fit-afi (蔽髪)	pitt-ai (tuft of hair) 毛髪・房。DEDR4168
mur-ato (腎・頭脳)	mūl-ai (marrow, brain) 髓・脳。DEDR5051
fōt-ō (女陰)	puṭṭ-am (pudendum muliebre) 女陰。DEDR2749
*sōs-ō > soso (女陰)『日葡辞書』	cūtt-u (pudendum muliebre) 女陰。DEDR2724 (tt/s)
*kōb-u > kobu (瘤)	kum-iṛ (anything round, hump of an ox) 丸いもの、牛の瘤。 DEDR1743 (m/b)
mar-u (大小便する)	maḷ, mōḷ (to urinate) 尿する。DEDR644
sit-i (背骨と肩甲骨の間)【和歌山】	ceṭṭ-ai (shoulder blade) 肩甲骨。DEDR2764
pit-i (首筋)【喜界島】	piṭ-ar (nape of the neck) 首筋・うなじ。DEDR4146
*fōr-ōsi (寒冷じんましん)	pur-r-u (scurby, scrofulous) 壊血病。DEDR4336
mutt-ya (痘痕)	mutt-u (pock of small pox, pustule) 天然痘。 DEDR4961

先の 500 語は、以上に見る15個の人体関係の単語を含んでいる。この中には多少詳しく説明の方が親切かと思うむづかしい単語があるが、単語の問題は、すぐ次でも取り上げるし、山下氏の53語の表に入っているものもあるので、詳細はそれらの項や、すでに発表した「解釈と鑑賞」誌について御覧いただくことにする。

ただしここで次のことをいうことはできよう。長田氏は500語の一覧表をくりかえし点検して、総数はいくつ、重複はいくつ、TLからのものがいくつ、サンスクリットと見られるものがいくつと、ことこまかに数を記しておいでになる。それにもかかわらず「比較研究には身体部位名を使うべきだ」などと発言をなさる。すでに大野の単語一覧表の中には前掲のように数々の単語があることは御覧にならなかったのだろうか。

[10] p. (5)―17行目。辞典にはない「意味」の実際 「大野教授は厳密な意味の対応を問題にされているが、引用した辞典にはない意味が用いられているケースが結構ある。そのいくつかをあげておく。」とある。

「ここにあげた例だけではなく、細かくみると、もっと多くなり、あくまでも筆者がざっと目をとおして気がついた例だけをあげた。」ともある。

対応語が真実に対応といえるものかどうかは最も核心にふれる問題である。だから疑わしいものは遠慮なく指摘せられるべきであり、対応語として提出した研究者は、どれだけの資料にもとづいて対応語と認めたのかを明らかにしなければならない。だから大野は14年にわたって「解釈と鑑賞」に毎月いくつかつ一語一語の考証を掲載して来た。大野の研究を論評しようとするならば、その雑誌を調べて詳細を知り、自分の取り上げる単語について大野

の研究を確認することが前以て果されるべき作業ではなかろうか。ところが、今回のシンポジウムの参加者は、前述したことだが、大野が集会に先立って各氏に郵送した『日本語以前』についてすら目を通さずに出席して発言された。のみならず対応語のインデクスだけを「ざっと目を通しただけをあげた」と、他にもまだまだたくさんの疑わしいものがあると示唆する文章をお書きである。では長田氏の指摘による「DEDR にない訳語による6個」が、大野の恣意的な捏造あるいは変形などであるかどうかを点検してみることにする。

その結果をあらかじめ概括すると、長田氏は DEDR のタミル語の部分が、TL からの抜粋であることを御存じなかった。

その結果、大野が、「辞典にない意味」を使ったと発言をなさった。大野の用いた「DEDR にはない訳語」はたしかに DEDR にない。しかしそれらは DEDR の親本である TL にはある。大野が「作り出した意味」はなかった。長田氏はムンダ語が御専攻と伺っている。他の言語についての研究を非難攻撃するには、いくらかのあらかじめの学習が必要なのであろう。

①kavar DEDR1325 大野はこれを「川」に対応させているが、DEDR にはそういう訳語はないという。確かにない。しかし大野はすでに『日本語以前』(1987)の108ページに TL を引用して kavar と日本語の kafa について解説を書いている。そして TL に載っている次の文例を引用している。

南ニ向カッテ流レル川ノ (kavarukku) 東側。S. I. I. III45

つまり、DEDR にその直接的訳語がないのは DEDR が、TL の抜粋だからである。

②poṭṭu DEDR4491 一覧表にはこれに mark on the forehead という説明がある。DEDR にはそういう訳語はないという指摘である。ところが poṭṭu という単語は TL に “Round mark, red, white or black, worn on the forehead.” とあり、次の文例がある。これはすでに1985年12月号の「解釈と鑑賞」連載36に書いておいた。

poṭṭaniyā nutal Tirukkōvaiyār 303

円イ印ヲツケテナイ 額

③kalai (to chase) DEDR1311 to chase という訳語は DEDR にないという指摘である。たしかに DEDR にはない。しかし TL には “6. to chase” とある。to chase にはタミル語で oṭṭutal と注がある。oṭṭu は「駆(か)る」という意味である。だから kal-ai は kar-u (駆る) と対応する単語である。日本語カル(駆)とカル(狩)とは当てる漢字はちがうが、類聚名義抄のアクセントは同じ。アクセントを含めて発音が同じで、その上、活用も同じだということは本来同一の動詞であるということ。『岩波古語辞典』にも「駆り」は「狩り」と同根とある。

④taṭṭu DEDR3036 大野の mat to sit on は DEDR にないという。ところがこれは TL からの、そのままの引用で、そこには Tēvāram 439:10 の次の文例がある。

taṭṭiṭukki yuri tūkkiya.

タタミヲカカエテ 吊ルシ箱ヲ 持ッテイク (王様ノアトヲ僧ガ行ク状況)

長田氏は500語の表をこまかく DEDR と対比して大野の逸脱を摘発しようとつとめられた

ように見えるが、DEDR には、同根の語として、同じ3036の項目の中に次のマラヤラム語を挙げている。マラヤラム語はタミルの西隣りの、近しいドラヴィダ語である。

taṭukku little mat for sitting on, as of school children

これをお読みになっていけば、たとい TL を見なくても大野の記述が理解されただろう。なお、周知のように、日本のタタミは古くは現在のような部屋一杯に敷きつめるものではなくて、円座（わらふだ）と同じく坐る場所へと持ち運ぶものであった。

⑤**taṇi** DEDR3047 大野はこれに to be satisfied という訳をつけている。それは DEDR には見出せないという指摘である。たしかに DEDR には

to abound, be profuse, increase in size, grow fat

とだけしかない。しかし TL を見ると、次の説明がある。

2. to be satisfied, fulfilled, as desire. (満足である、欲求が満たされる)

[tr] 1. to relieve, appease, satisfy, heal. (楽にする、満足させる、不足をいやす)

古い用例は数々あるが一つだけあげておく。次にあげる例には **taṇi** が二つある。

Maṭantaikku tiru mārupu nalki, avaḷ taṇiyā
(男ハ) 女ニ (自分ノ) 立派ナ 胸ヲ 与エテ、 彼女ガ 満足スルヨウニ
vēṭkaiyum ciritu taṇittanaṇē. Cilampu. 23 : 122
恋ノ渴キヲ スコシバカリ イヤシテヤッタ

何故 DEDR がこの satisfaction に関する訳語を省略したのか不明である。ことによると同じ仲間のカンナダ語、テルグ語、さらには北方のマルト語などに、

to thrive, become full-grown, full, matured, rich (繁盛する、成熟する、一杯の、成熟した、金持ちの)

の意味があるのにひかれて、その方面の訳語だけに限定したのかもしれない。

日本語でも、室町時代には「タノシイ人」といえば「富んで豊かな人」の意であり、タノシイはもっぱらその意で使っている。タノシイが室町時代に一般に「金持ち・豊か」の意味だったことは、経済発展を遂げた室町時代の社会生活において、古くは肉体的満足感を表わしていたタノシが、意味を曲げ、偏って行って経済的繁栄を表わしたのだと思われる。しかしこのカンナダ語以下の記述を見ると、タノシには本来、rich とか thrive という意味があり、それが室町時代に強く表われたのだと見るべきもののようである。

⑥**pokkanai** (hole, grave) DEDR4452 とあるが DEDR には grave はないという指摘である。タミル語 poku は「穴を掘る、穴をあける。to make a hole, perforate」という意味だが、それと同根の pokkanai は「樹や石や地面にある穴。岩の割け目。hole in a tree, stone or ground. cleft in a rock」である。

pokk-a という語形、pok-u という語形そのものは、日本語の fak-a ときちんと対応する。弥生時代の北九州の集合墓地を見れば、墓とはまさしく地面に掘る穴である。北九州の集合墓地は、カメ棺にせよ、支石墓にせよ、箱式石棺にせよ、すべて地面に穴を掘って造る。だから poku (穴をはる) が日本語のハカ (墓) と対応していると見るのは自然だと考える。さらにタミル語の北のテルグ語の隣りにコラミ語がある。そこの単語に、同じ pokk- を語根

とする pokka がある。その pokka には ditch, grave [掘った溝、墓] という訳がついている。

大野は未だ pokku または pokka が「墓」(ハカ) にぴったりと当たっている実例をタミル語には見出していない。Kothandaraman 教授も pokka が直ちに grave を意味する例については首を傾げた。しかしタミル語 poku または pokku と日本語 faka とが対応の関係にあることは音韻の上から見て確実であるし、事実の上でもタミルの Megalithic Culture の墓と北九州の弥生時代の墓との類似は極めて著しいことを考慮し、poku, pokka と faka を対応語とした。

以上が長田氏の指摘する6語についての説明である。長田氏はこれらの DEDR にない訳語が、あたかも作為・捏造・逸脱であるかのような言い方をなさっている。しかし DEDR はタミル語については TL からの抜粋本にすぎない。DEDR の序文に「使用した多くの辞書は時に冗長で、同じ単語について多くの同意語をあげているので、経済の観点からいくらかの刈り込みが必要だった。この作業によって失われたものがある」とある。そのような見地から省略された意味の中に、日本語と対応するものが実際には少なからず見出される。

大野は世界の慣例に従って DEDR の番号を単語につけてはいるが、目じるしとしての便のためだけで、タミル語については DEDR にある訳語によっては研究をしていない。いつも TL に戻り、TL を読み、それを使っている。その TL ですらも、単語によっては扱いの仕方が狭く、意味記述が不足と思われるものが少なくない。例えば kaṭaṇ, kōmān, pē など は、TL の訳語では到底その意味を正確にはとらえられない。

TL は Kothandaraman 教授がいわれたように Sangam の単語の半分ぐらいしか収録していないという。大野の経験によっても Sangam の中の単語が TL に見えないことが往々ある。そしてまた、TL は農業関係の単語の取扱いが粗略である。これは TL の編集に関係した学者がみなカーストの高い、日常生活にもサンスクリット語などを多く混用している、農業の実際に暗い人々であったことが大いに関係していると思われる。また民俗関係の単語にも、もっと記述があってもらいたいと思うことがある。

大野は、Sanmugadas 夫妻の協力によって、古典の実例の蒐集と分析に力を注ぎ、TL がない用例や、意味を調べて考察している。それは500語の単語の Index を見ただけでは推測できないものである。

[11] p. (5)―4 行目。方言の対応 「日本語のうち方言を使用した例64」とある(これを大野が数えてみると47例であった。64例とは何故であるのか、ついに分らなかった)。なおついでに言えば、山下氏が「問題の語と語義」として表示した単語53語には、まったく同一の語の重複が2例、不明が1例ある。その理由も不明である。方言を用例として使用することについて長田氏は次のように断定した。

「日本語の方言の例はそれが日本語に古くあったと確認できていない例である。」これは一応もっともな見解に見える。大野も方言を例として使うことには危惧をいだいていた。しかし、次にあげる例を見てから、日本の方言の中で出自不明として放置されているものの中には、南インドの単語と関係あるものがあると考えに至った。その次第を説明しよう。

大体、比較言語学では親族名称を扱わない。乳幼児が父母を呼ぶには、p や m の音をふ

くんだ語が多い。それはあたかも対応であるかのように見える。しかし乳児が最初に調節音として発する音は唇音の p または m が多いから、言語の系統に関係なく、各国の言語で、「父」「母」に p や m を含む語が多い。papa, mama, fafa, father, mother みなそうである。だから比較言語学では親族名称を扱うことは避ける。しかし、次の表を一覧願いたい。

日本の方言に見える親族名称の体系

意味	タミル語	日本語	東北地方	南西諸島
父	accan	accha acha acha > aja	岩手・青森(下北) 青森(西津軽)・秋田(平鹿)	沖永良部島・与論島・八重島 喜界島・徳之島・沖永良部島・与那国島
父	ayyā	aya	青森(津軽)・岩手(九重)	石垣島
父	tantai	tanda	秋田・岩手・山形・新潟	
父	tātai	dada	青森・岩手・秋田・山形・熊本	
母	āyāl	āya ayā aya	青森(下北) 青森(下北)・秋田・山形・新潟	沖縄(首里)
母	āccāl	accha	青森(津軽)	asse 奄美
母	avvai	appa	青森(津軽)・秋田(鹿角)・岩手	種子島・沖縄 appa (祖母の意) 八重島・西表島
母	āttāl	*ata > ada	青森(津軽)・秋田・山形	
母	ammai	amma ammā	福井・石川・三重・高知	奄美・沖縄・八重島・西表島 沖縄・奄美・与論島・久米島・八重島
兄	aṇṇā	annyā	福島・山形・新潟・石川	annyō 奄美瀬戸内・加計呂麻島
姉	aṇṇai	anne	岩手・福島・新潟・茨城	

「父・母・兄・姉」という最も基本的な親族名称のタミル語11語が組織的に日本の方言と対応している。その方言も各地に散在しているのではなく、青森県を中心とする東北地方と、南西諸島とに見られる。これは方言圏論的な解釈によって適切に理解される。つまり、ある時期までは日本全土に accha, aya, amma などの親族名称が広まっていた。それが、ある時期——恐らく古墳時代かその前後に、政治の中心となった大和地方を中心点として、titi (父) fafa (母) 体制の名称が広まり、古い accha, aya, amma 体制の親族名称は本州の北端と、南西諸島などの外縁部にだけ残存した。それがこの表に現われていると解釈する以外に考えようはないと思われる。一つ二つの形がたまたま似ているのではなく、組織的にタミル語の親族名称が日本語に入っている。青森県の西部の津軽地方ではアッチャが母、アヤが父である。しかし、同じ青森県の東部の下北地方ではアッチャは父、アヤは母である。これは何故か、謎であった。しかし、タミル語を見れば、それは水解する。津軽のアッチャ(母)はタミル語の āccāl (母) を受け入れた形。アヤ(父)はタミル語の ayyā (父) を受

け入れた形。下北のアッチャ（父）はタミル語の accan（父）を受け入れた形。アヤ（母）はタミル語の āyāl（母）を受け入れた形と考えられる。下北の80歳以上の古者に集まってもらって話を聞いたことがあるが、アヤ（母）は昔はアーヤ（母）といていたとのこと。これは āyāl の長母音と対応する。

方言には、文献には登場せず方言にしか残存しそうもない人体部位の名、土地、地形に関することば、あるいは他人に対する侮りのことばなどがある。これらは、出自不明として放置されて来たが、むしろ他の対応語同様、南インドの言葉に関係すると見るべきものがある。

日本語が東部方言と西部方言に大別されることは方言学の常識であるが、東部方言は全体的には江戸時代以後になって文献に現われる。江戸時代とは17世紀以後である。従って、時代的には新しいもののように見えるが、実は古い形と意味とを保っているものがかなり多いと、タミル語との比較をするようになってから感じている。その最たるものが青森県の方言である。対応語の一覧表には《方言》とだけしか入れておかなかったが、青森・秋田・岩手の方言は、タミル語との対応語の宝庫といってもよいくらいである。

なお長田氏の指摘された「コロ」は江戸時代に複合語としてエノコロ、その他数々の例があり方言だけでは取扱えない。ホゴについては方言としても、その分布は、愛媛・高知・大分・広島・島根・宮崎等にわたっており、フゴ（魚籠）の形では、江戸時代の方言辞書『浜荻』に、仙台の例があがっている。このように分布の範囲の広い方言は、由来もまた古いと見るべきものである。

[12] p. (6)－1 行目。『岩波古語辞典』と語源

長田氏は大野の『岩波古語辞典』を点検し、それと「対応語一覧表」とをつき合わせて相違点をあげ、「矛盾」として指摘している。

長田氏が使用されたのは1974年の初版らしい。大野がタミル語について発表をはじめたのは1979年だから、タミル語は『岩波古語辞典』の初版には関係がない。つまり、『岩波古語辞典』は日本語が8世紀までしか遡れず、せいぜい朝鮮語を扱うところまでの大野の研究の時期の著作である。従って、そこに展開されているのは、タミル語なしに日本語の内部だけで何らかの合理的な語源を探求した結果である。

『岩波古語辞典』は1990年に補訂版を刊行した。この本は共著であるから、そこには積極的にタミル語による語源説は取り入れていない。しかしタミル語を考慮すれば当然誤りとされるような旧版の語源説明の部分は消去するようにつとめた。だから、タミル語との関係が判明したアマハコ、カドなどについての旧版の語源説は補訂版では抹消してある。タミル語によって大野の語源探索の範囲が広がったのに伴って見解の相違に至るのは当然である。それが学問の進歩というものだろう。『岩波古語辞典』の語源説明と「対応語一覧表」との間に相違があるものとしては、長田氏が指摘せられなかったアハレ（哀れ）などもある。これも補訂版では旧版の語源の部分は抹消してある。詳しく説明する必要がある場合、辞書では紙面がそれを許さないで、手をつけずに置いたものもある。

およそ語源研究という課題は、ある限定された資料の中で、その資料を組み合わせて合理的と思われる説明を加えるもので、新資料が出てくればそれを考慮に加える。どこまでさか

のぼっても、単語にはそれ以前はどうだったかという問題がある。その点を問われれば結局は不明と答えるしかないものである。例えば日本語でテ（手）、アシ（足）というとき、何故テ、アシというかをいくら考えても、8世紀よりさかのぼるとテ（手）の古形はタだったとまではいえるが、その先は不明といわざるを得なかった。ところがタミル語との比較によって、B. C. 2世紀ごろタミルでは *tōl*（手）、*aṭi*（足）といていたことが判明した。*tōl* が日本語では *o* と *a* との対応によって *ta*（手）となり、日本語内部で後に *ta* > *te* という変化が生じて *te*（手）という形が生じたと説明できるに至った。*aṭi*（足）は *ṭi* → *si* によってアシに変わったとはいえる。それでは *tōl*, *aṭi* のもっと古くは何だったのかと問われると答えようがない。語源研究とはそういうものである。

以上で長田氏が総論的にはじめに書かれた文章——従ってこれは各氏の主張の主な点を取りあげた文章となっているが、——それに対する大野の見解を述べた。詳細は各氏の部分で記すことにする。

DEDR に収められた3500項目のタミル語の中で、約500語が日本語と対応するということから考えて、将来の日本語研究は、タミル語、あるいはドラヴィダ語を考慮に加えるのが常識となる時が必ず来ると大野は思っている。長田氏は「大野教授が500語以上の対応語といって豪語する」と最後に書いておいでだが、大野は豪語するつもりは毛頭ない。長田氏はいろいろと、数字をあげて、500語の壁を崩したいと努力せられたが、冷静に計算なされば分るようにタミル語だけで約500語の対応語は存在する。これはわずかな量であるが、タミル語と日本語との同系性の立証には役立つ数字だと大野は考えている。それだけのことである。

長田氏は氏の批評の文章のはじめの方に、「勝ち負け」のことをお書きになった。しかし研究そのものには勝ち負けなど何もありはしない。「真実」に参与する喜びと、それへの願望だけが研究のささえである。大野のタミル語同系説はまだ緒についたばかりのものである。まだ幾多の問題が前途に横たわっている。大野は長田氏が研究の原点に立ち戻って、勝ち負けの呪縛を切り棄て、純粋な探求心に燃えて日本語の系統論の論議と、追究とに参加せられることを期待したい。

2 山下博司氏の論について

[13] 比較研究と古典語 山下氏が140枚に及ぶ論評を公表されて、最後に「問題の語と語義」という欄を設け、53語を提示せられた。これまで大野の見解を批判し、あるいは拒否せられた方は少なくない。しかし、そのほとんどすべてがタミル語を御存じない方だった。それは学問にとって不幸なことであった。ところが山下氏は古典タミル語を読み、その上で大野を論評している。まずその点を歓迎したい。具体的に疑義が表明されれば、答えによって黒白が明らかになる。

実は、この批評を見る前には、次のように考えていた。あれこれと論議のある語例はすべて捨ててしまう。異論のある単語は捨ててしまっても、日本語とタミル語の同系論の論証に必要なだけの対応語は残るはずである。全部捨てられるような語彙ならば、Zvelebil や

Vacek や Asher、あるいはタミル人の Kothandaraman, Sanmugadas が Tamil-Japanese の系統関係にこれほど関心を払い、それぞれ世界に向って論文を公表するはずはない。彼らは日本語はほとんど知らないにひとしい。だがタミル語については世界に通用する学者である。その人たちは大野の研究について、誤りを指摘することはあるけれども、修正すればよいと扱って、全体として研究に意味を認めているのだと思われる。

大野の経験から言って、500 語の単語を扱えば、その一語一語の意味について異論は当然あるものである。また、研究に間違いがないはずはない。そこで、具体的に疑わしいとされる単語、異議の提出された単語は、捨てようと思っていたのだ。ところが、すでに述べたように長田氏の異議ある語例の 6 例中 5 例は長田氏の見落としによるものであった。また、山下氏に異議のある 53 例も、実際は (46) ページ以下に示すように、その大部分は大野が文献的証拠を持っており、あるいは説明によって理解が得られるようなものである。だから異議が提出されたからとて、その単語を全部棄てることが妥当とは思われなくなった。

山下氏の論を見て行くと、山下氏は大野の所説にこまかく立ち入って論評を加えている。では、それが「なるほど」と受け取れるかといえば、必ずしもそうではない。そこで大野は山下氏の個々の論述に対して、それぞれ大野の資料を提示し、最後部の 53 語についても、大野の根拠を明示しようと思う。

それにしても、非難や論難を避けようとするなら、あらかじめいくつかの道があった。その一つは単語の source を DEDR にしぼることである。その二は、方言の例などを捨てて、双方とも古代の例に限って取扱うことである。

[14] サンスクリット語の排除 まず DEDR にある単語だけ扱うことについて述べよう。DEDR は編者 Burrow と Emeneau がサンスクリットの専門家であるから、DEDR にはサンスクリットに由来すると見られる単語の混入を避けている。だから DEDR だけから単語を採取すれば「大野の単語表にはサンスクリットからの借用例が多い」などという非難をうけることはなかった。それは予測できた。しかしサンスクリットに由来するという単語で大野が取り入れたのは 10 個前後である。それは全体として結論にひびくものではない。

大野の場合、比較語彙の数は十分あるから、サンスクリットに由来するといわれる単語は同系の証明には不必要なのである。何故それらを加えたかといえば、TL のサンスクリットからという指示にも、結構不正確なものがあること。また、取り上げる単語の概念が文明比較の上などで、かなり重要と思われるものがあるからである。

それでは、一覧表に加えた一例をここで説明してみよう。タミル語に katai がある。TL にサンスクリット kathā から来た語と注がある（だからこの単語は DEDR に載っていない）。大野は katai を日本語の kataru (語る) と対応すると見た。それは katai につけられている訳語が、大野の注意をひくからである。

- katai**
1. Long story, anecdote, or narrative. (長い物語、逸話、話)
 2. Epic. (叙事詩)
 3. Perunkatai, the story of Utayanaṇ. (王様の物語)
 4. Fabrication, falsehood, lie. (虚偽、嘘)

5. Romance. (空想的な話)
6. Fable, apologue, fiction. (お話、寓話、作り話)
7. Message, communication. (告げること、通信)
8. Manner. (物事の仕方)
9. Tale, conversation, chitchat. (話、会話、おしゃべり)

これらの意味を見れば、日本の平安時代の多くの「かたり」「物語」を知るものは、katai の訳語がすべて日本語の kataru, katari (語る、語り) にあてはまることを見て取るだろう。「物語」という概念は日本の文学史にとって重要である。それが音声形式においても、意味においても対応と見える kat-ai としてタミル語にある。遠隔の地の言語の間で、これほど単語の意味の中心点とその分岐がぴったり「一致」することは、まず偶然とはいえないと思う。それだけでなく、これを対応語と判断するいま一つの理由がある。それは日本語の発話に関するほとんどすべての動詞が次のようにタミル語と対応することである。

日本語	タミル語
if-u (言ふ) (語頭の c/s の脱落)	cepp-u (言ふ)
fan-asu (話す)	pann-u (話す)
nōb-u (述ぶ)	nuv-al (述べる)
sak-ebu (叫ぶ)	ak-avu (叫ぶ) (語頭の c/s の脱落)
ōr-abu (叫ぶ)	ur-a, ur-appu (叫ぶ)
fōk-u (祝く、神を称える)	puk-aṛ (神に称え言をいう)
fa (言の葉のハ)	vāy (語、言葉)

「話す」という単語などは、日本語の中で古い例がないので「放す (はなす)」から新たに転義して中世に生じた言葉かと思われて来た。しかしタミル語に pannu がある。だからこれは古くからある対応語なのだが、何らかの理由で (それは現在分らないのだが) 文献に時代としては遅れて現われたのである。このように、発話行動を表わす単語はほとんどすべてタミル語と対応している。だから日本語 kataru (語る、騙る) とタミル語 katai との対応もここに含まれると見た方がよいのではないかと考えるわけである。

大野は天理大学教授松村一男氏を煩わして、kathā について調べて頂いたことがある。それはサンスクリットといっても二種類あると見るからで、(1)サンスクリットにあるだけでなく、ヨーロッパ諸語の最古形にもそれがあるもの。(2)サンスクリット (インド・イラン語派) にはあるが、ヨーロッパ語にはその語はないもの。この二つを区別して(1)はインド・ヨーロッパ語の古い系統に属する言葉だが、(2)に属するものは、ドラヴィダ語とサンスクリットとの間に相互のやりとりがあると見るもの。以前はすべてサンスクリットからドラヴィダ語に入ったと考えられて来たが、最近では逆にドラヴィダ語からサンスクリットに入り、またドラヴィダ語に入ったと認められている単語もあるという。だからそれらはサンスクリットとドラヴィダ語と、どちらが本来的か分らないものと扱うべきではないか。こういう見方によって、大野は松村氏に伺いを立てた。松村氏は風間喜代三氏にもたずねて下さり、「kathā はインド・イラン語派であることはたしかだが、インド・ヨーロッパ語としては不

確実」とのことであると伺った（1987年4月16日付吉田敦彦氏宛の端書）。

大野の考えではタミル語は B. C. 500年前後に、日本でそれまで行われていた言語の上にかぶさって来たものとするのだから、その頃のタミル語の諸観念、あるいは単語の中で、文化的に、あるいは文明史的に特別な概念を表わすようなサンスクリットの単語の中には、すでにタミル語に混入していたものがあると考えの方が自然である。実際に Sangam の歌の中にはサンスクリット系と注のある単語が混用されている。勿論文法などはタミル語のそれであったが、文化語などはサンスクリットをタミル語の側がその時期にすでに受け入れていたものが存在し、その中のいくつかが他の純粋のタミル語に混ざって日本語に対応として見出されることは、あり得ることだと大野は見ている。

「もしドラヴィダ語と日本語とが共通祖語を持っていたとしても、それは数千年前のことにちがいない」という風に考える人々は、上に述べたことを聞けばたちまち、「それは二系統の単語の混交で大混乱だ」などと言うだろう。しかし大野はタミル語と日本語との関係が生じたのは約2500年程度昔のこと、それほど古いことではないと見ているわけである。

ここで他の例を出そう。アーリヤ系の単語が8世紀の日本に使われている例がある。スメ神（皇神）、スメラミコト（天皇）などのスメ、スメラがそれで、仏教でいう須弥山（シュミセン）のシュミでもある。また、今日の英語で「世界のサミットの会議」などという summit の sum- の先祖でもある。これは sumeru という「最も高い」という意味のインド・ヨーロッパ語であること間違いない。この sumeru がどのようにして日本語に入ったかは今のところ不明だが、スメは万葉集に普通に使われている。このことは“厳密な系統論”“機械的な系統論”を奉ずる人々には理解も説明もできないことではなかろうか（ことによると、そういうものは偶然の一致とするかもしれない）。こうした“最高”とか“神”とかいう観念は語派、語族を越えて拡散し、伝播することがある。アイヌ語の kamui（神）なども日本語から kamu（神）が入ったものと見られている。

以上のような考えでサンスクリット系と見られる単語も少数だが捨てずに置いた。

[15] 対応語の年代の確立 単語比較の材料について、非難を避けようとする第二の方法がある。比較の相手の単語が非常に古いものだとすることを形式的に明らかにできるような手段を講じることである。例えば Sangam に例があるものだけを用いる。形式的にそう限定すれば非難を減らすことはできる。そこで用例の古さの観点から見るときに大野の研究はどんな状態であるかを以下に数字として示して置こう。

1. Sangam に用例のある単語	332語
2. 3世紀～5世紀の用例のある単語	10語
3. 6世紀～9世紀の用例のある単語	43語
4. 10世紀～18世紀の用例のある単語	38語
5. 19世紀以降の用例のある単語	85語

合計 508語

ここにある数字には文法関係の助詞・助動詞20個が加えてある。助詞・助動詞の類はすべ

て Sangam 時代のものである。大野が 500 語と言うのはこれである。すでに書いたように、ヨーロッパで Rask が比較言語学の最初の論文を書いたときに扱ったのは 352 語であったのだから、Sangam に例のあるものだけを持ち出すのも一法であったかもしれない。それだけを使っても同系性の証明のためには数としては十分である。

ところが、19世紀以降の例しか見出せないタミル語でも、日本語に対応語を求めると、日本の最古の時代である 8 世紀に例のあるものもある。例えば、特殊な単語だが、タミル語 **puṭṭam** (pudendum muliebre) と日本語 **fōtō** などはそれである。fōtō は古事記に例があるが、タミル語では古例はない。しかし考えて見れば、このような単語は歌唱を中心とする古典文学に現われようもない。こういう場合、その例を排除することが妥当だろうか。

また日本語の文献に記載のない方言の親族名称、aya・accha の体系がタミルの古語の親族名称と組織的に対応することは(20)ページにすでに記した。大野は日本語の語彙について、語の年代的持続性、意味変化の類型、方言の持つ価値にわたって、研究して来た。その結果、単語によっては、方言に残存する形が実は最古の日本語の形である可能性をもつ場合が少なくないという判断を持っている。その観点からは、比較的近代の例しかない単語でも、それを排除すべきでないと思われる。

Kothandaraman 教授はこういったことがある。「自分はすべてのドラヴィダ語の動詞その他を調べたことがある。しかし、タミル語について疑問とすることが、他のドラヴィダ語のおかげで分ったことはほとんどなかった。逆に他のドラヴィダ諸語はタミル語によって、自分の現象を理解する糸口を得ることができることが多い。しかし、日本語について比較し、大野の話をきいて行くと、そこにあげられる事実から考察の糸口をいくつも得た。だから日本語に関心を持たざるを得ない。」こう言っているからといって、Kothandaraman 教授は何でも大野のいうことをきいているわけではない。vāy についての大野の見解には以前は賛同しなかった(そういうとき大野は pending として再考する)。

以上のような考えによって、サンスクリット問題も、方言の問題も抱え込んで行ってかまわないという判断に立って、現在の表ができている。今考えてみれば、サンスクリットとされる単語は別枠を作ってそこに収め、あらかじめ誤解を避ける道を講じておけばよかったと思う。それをしなかったから、単にその Index を見ただけで誤謬だとする発言が生じた。サンスクリット語系とされる単語は、家本氏も指摘しておいでだから先に行って、実例とともに、それを収めた理由を個々に説明する機会があるだろう。

ではまず比較言語学の基本についての山下氏の認識について検討することとしよう。

[16] p. (32)—17行目。祖語形とは何か 山下氏は言う。「(大野が)ドラヴィダ語の祖語形に無頓着を決め込み…、直ちにタミル語と日本語の問題に局限して論ずることの危険性は自ずから明らかであろう」とある。では比較言語学における祖語形(または祖形)とは何か。

そこには二つ問題がある。一つはまず原理的に祖形とは何かということである。山下氏、あるいは当日議論に参加せられた方々は、祖形なるものを信奉し、それを構築した上でそれと日本語とを比較しなければならぬと思い込んでおいでのようにお見受けした。しかし実は比較言語学ですでに明らかになっているように「祖形とは fiction」なのである。同系に属

するという具体的言語 A, B, C, D…の古形にさかのぼり、さらに文献以前に祖形 X なるものが存在したとする。それが、くだって A, B, C, D…という具体的な古形に至ったのだから、その X は A, B, C, D…という現実形を派生しうる A', B', C', D'…という要素をすでに含んでいたと見なくてはならぬと考え、それらをふまえて祖形 X を再建する。だからたいていの場合、祖形とされる X という音形は、かなり複雑な形をしている。しかしそんな形が実在したのか。誰もそれを立証することはできない。「再建形」なるものは、学者それぞれの意見によって相違する。それは fiction だからである。再建という作業は各言語にわたる綿密な実証の結果をふまえて行われるにかかわらず、それは架空の“祖形”を生み出すのである。

ヨーロッパで比較言語学が発出したときに、Rask はヨーロッパ語の「祖形」をすでに持っていて研究を始めたか。否である。そういうものは無かった。祖形などというものは、後で言い出され作り出されたものだ。Rask はアイスランドの言語と、トラキヤ語との比較をした。トラキヤ語とは何か。ギリシャ語とラテン語との合体である。Rask はあるときはギリシャ語だけ、あるときはラテン語だけ、あるときはリトアニア語を加えて単語の証明の材料とした。それは今日の目から見たら異様なものである。このシンポジウムに参加した大野批判の方々の前に、Rask の最初の表が提示されたらばたちまち、「そんなばかな。ギリシャ語とラテン語の区別も知らないのか！」ということになる。ところがヨーロッパの学者はそれを見て、そこに大事な先見性が含まれていることを読みとり、その研究を推進してヨーロッパ語の比較言語学を作りあげた。比較研究は「祖語形」から出発するものとするのは山下氏の謬見であることをまず明らかにしておく。

その二は、もしドラヴィダ語の祖形ではなく、ドラヴィダ語の文献的な最古形を問題にするとしても、その場合にタミル語が占める位置についてである。ドラヴィダ語の現実的最古形を持つのはタミル語で、タミル語がドラヴィダ語の代表的なものだと、Caldwell も言っている。彼はドラヴィダ語族という一群の存在をはじめて証明した人である。タミル語は他のドラヴィダ諸語とは較べものにならない、B. C. 200年から A. D. 200年という古い歴大な記録を持っている。単刀直入、具体的にそのタミル語と日本語とを比較研究することが、最も直接的な、確実な、無駄のない研究の仕方である。新しいことの研究には、結果を得るために最も有効な局面に限定して、事態を明らかにして行くことが大切である。山下氏はそういうふうにはお考えにならなかった。

研究とは、人の糟粕をなめることではない。本を読んで覚えている知識の量が大事ならば、すべての人間は大百科事典の下に潜伏せざるを得ないことになる。百科事典と研究者とのちがいは、蓄えてある知識の量の大小にあるのではない。問いを解くために必要な材料を集め、それを正確に評価できるか否かにある。

山下氏は氏の文章のはじめに「自分は非言語学者であり一介のタミル語読みにすぎない」とおっしゃっている。にもかかわらず、実際は研究の方法論にまで及んで発言せられている。すると、比較言語学の根本についての氏の理解不足がひびいて来て、他者の研究が正確に評価できなくなってくる。山下氏は9個の助詞の対応を、かなり詳しく論評した。そのすべ

てにお答えしたい。

[17]—(i) *vāy*

これについては Kothandaraman 教授も賛成でなかったが、(15) ページに述べたように大野はその後にも研究を進め、その見解を公表している。それを御覧頂きたい。

[18]—(ii) *tān*

大野に対する批判として、方法的考慮の不足、具体的な誤りの多さを山下氏は指摘している。しかし、批判にはまず大野の研究に対する理解が先行すべきものであろう。山下氏は大野の助詞の取扱いが誤りに満ちているとして、その中に *tān* を挙げ「“*tān*” についても同様の疑問が生じる。これは、氏によって日本語の「ぞ」(*zö < sō*) に対応するものとされているが、そもそもタミル語の“*tān*” は、再帰的な機能をもつ代名詞が強調の助辞として転用されたものと見るべきであろう。日本語の「ぞ」と果して起源的に関連するものであろうか」と書いておいでになる。

大野は『係り結びの研究』という単行の書物を出版している(岩波書店1993)。その中にソ、ゾについて34ページを費やしている。その書物の読者は、そこに次のような文を見出さだろう。「ゾは上代には清音ソで、それは代名詞「其」としても多くの用例をもつ、同時に終助詞として教示・強調に使われ、また係助詞としても使われる。」(p. 365)。

[19]—(iii) *kāl*

これについて山下氏は3ページ半を費やして大野を論難している。その山下氏の論評の中心点は二つある。大野は *kāl* に *family, relationship* という訳を挙げているが、

- ① 「*kāl* の語にとって *family, relationship* の義はほとんど重要性を持たない。」
- ② 「Winslow, Pillai, Mousset, Dupuis のタミル語フランス語辞典、或いは他の現代タミル語の辞典類のどれをとってみても *kāl* の項目中に “*family, relationship*” またはそれに類する語義は一切記載されていない。」

この①も②も簡単な誤りであることを以下に示すことにしよう。

① *family, relationship* という概念は多くの社会において重要な役割を果たすものである。この概念はアルタイ系の蒙古語、満州語などには *kala, xala* の形で存在する。従来、大野は日本語の *kara* (家柄、山柄などのカラ) をそれらアルタイ系の単語と結びつけて考えて来たので、タミル語の *kāl* (*family, relationship*) と対応させてよいか否かについては慎重な考慮が必要であった。TL の説明は短小で、心もとなかったから、以前 Kothandaraman 教授に質問したときのノートがある。農村出身で、タミルの農村の生活をよく御存じの Kothandaraman 教授はいう。

family, relationship の意味の *kāl* は広く使われる言葉である。TLには “*family, relationship*” の他に、それとならんで “*Degree of consanguinity or an affinity*” とある(日本語でいえば「親等」つまり血筋の近さの度合いである)。*kālvaṛi* という言葉もある。TLにはそれは *Lineage, family* (血筋・家族) とある。*kāṇmuḷai* という項目もある。これは “*son, child, as offshoot of the family*” (家族の分枝としての息子、子供) である(*kāṇ* は *kāl* の音便形)。*kāl* が複合語の後項に来る言葉としては *iraṇṭāmkāl* (二代目)、

mūṇrāmkāl (三代目) のようにも使う。

大野はここで irañṭāmkāl について、「二代目」と訳しておくが、“Second generation?”と質問すると、“Second branch.”ということだった。その意味は、うまくそのまま一語の日本語になりにくいと感じた。Kothandaraman 教授は、網の目を大きく拡大したような図を書いて、その結び目の一つ一つの関係にたとえて kāl を説明してくれた。

このように kāl は社会生活の上で重要な役割を果たしている概念である。山下氏は、kāl の relationship という意味の重要性を認識していない。

②山下氏は Winslow 以下各種の辞典を見ても「kāl の項目の中に “family, relationship” またはそれに類する語義は一切記載されていない」と書いている。ところがその Winslow の辞典には、kāl の項に、12. A degree of consanguinity (親等) (血筋の近さの度合い) がある。これは TL の記述の一つの基礎となったに相違ない訳語である。そこにはタミル字で irattakkalappāmuravu とある。これは一語ずつ直訳すれば「血の混交の関係」ということで、kāl のもつ degree of consanguinity の意味の説明である。さらに Winslow には前述の kālvaṛi もある。これは多分 TL の kālvaṛi の下敷きとなったものだろう。

kālvaṛi Lineal descent, succession (直系の子孫、後継者)

このように kāl という言葉の family, relationship に関係する意味は、Winslow にはっきり記述されており、その上複合語も掲載されている。山下氏はそれらの説明と単語を読み取らなかった。タミル語の説明の最初の部分 iratta- は「血」である。これは family を連想させる単語である。その上また、TL の kāl には、shoot, sprout, sapling, son (若木、若芽、息子) という relationship, family に極めて近い関係のある訳語も並んでいる。

一つの単語の意味を判断するに当って、当該の項目の目につく訳語を見て、そこに用例があるかないか。用例が古いか新しいか。そういうことを見るだけで判断を下してはならない。単語の意味を考える時には、それを含む複合語にも目を配らなくてはならない。それはどの言語の研究にも常識的なことである。

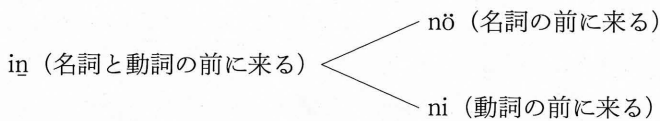
kāl は大きい単語だからいろいろ書くことがあるが、紙面を使いすぎるので、ここまでにする。ただ、大野は『岩波古語辞典』に書く前から、カラの由来について考えて来た。金田一京助先生の記念論文集にカラという一語についての論文を書いたこともある。だから、今の別の考えに移ったには、それなりの考慮を払い、それなりに専門家の意見をただし、できるだけの——わずかではあるが——努力をその単語に注いだことを言っておこう。なお、山下氏は Rajam 女史の研究を引用していろいろ言っておいだが、それについては oṭu のところで言及する。

[20]—(iv) in について

この助詞については、大野は Sanmugadas 夫妻と協力して何百という用例を採集・分析して解釈をくださった。in についてはその用法の一つが日本語の nō (助詞ノ) と対応し、他の一つは ni (助詞ニ) に対応する。つまり、タミル語の一つが日本語の二つに分かれていることが判明した。逆にいえば「の」と「に」とは一つの源から出ている。図示すれば次のような関係が分かったのである。

タミル語

日本語



このことを知るまで日本語の格助詞の *nō* と *ni* とが、起源的に同一だとは全く思っていなかった。このことが分って、*nō* と *ni* とは名詞の前にくるか、動詞の前に来るかという相違の他は、用法がほとんどすべて同一であることにはじめて気がついた。これは全くの驚きだった。語形の変化としてはタミル語の *in* の *i* が落ちている。日本語の *nō*, *ni* には *ō* と *i* という母音が *ŋ* の後にそれぞれ加わっている。これは大きな相違である。しかしそれは、タミル語と日本語との音節構造の相違に原因がある。タミル語は一音節が CVC (子音・母音・子音) という構造を持っている (CV という形のものもちろん存在するけれども)。ところが日本語では音節は CV (子音・母音) という、常に母音で終るという特性をもっている。この構造の相違によって、タミル語の CVC という単語は日本語では末尾に V をひとつ加えて① CVC+V つまり CVCV という形になるか、あるいは CVC の第二子音が脱落して② CV という形になる。それが *in* と *nō*, *ni* の場合にも原則としてはたらいっている。

また、タミル語の *in* を日本語でそのまま使うとする。*in* は必ずその前に来る言葉の後につくのだから、日本語ではその前に来る言葉の末尾の V (母音) と接触して CV*in* となる。母音と *i* とがつづく、いわゆる母音連続をおこす。この現象は、その発音のしにくさを避けるために、日本語においても、タミル語においても厳重に避けられた。そこで *in* の *i* は脱落せざるを得なかった。すると *in* は *ŋ* ひとつになる。ところが日本語は *ŋ* ひとつで終ることは許さず、それを CV の形式にする。そのために *ŋ* のうしろに母音をひとつ加えなければならない。そこで「その後ろに名詞が来るときには *ō* をつけて *nō* とする。その後ろに動詞が来るときには *i* をつけて *ni* とする」ということをした。この結果、*nō* と *ni* との形式上の区別が日本語において生じた。

正直に言って大野はこのことを知ったときハッとした。*nō* と *ni* など、古来存在していて、今日も普通に使う。これらは古典語で使用度数の最も多い、誰しも知っている助詞である。しかし、タミル語が考えに加わってみると、タミル語と日本語との音節構造の相違による結果が歴然と現われ、そこに *nō* と *ni* という二つの助詞が誕生した。このことは日本語の文法に関心を払って来た研究者に、本当にしびれるような感動をひきおこした。2500年前の日本人の言語活動の具体的様相を、そこにかいま見たように思ったからである。

山下氏の文章を見ると *in* と *nō*, *ni* についてわずかに「用法において或る程度の並行現象が観察されることは確かである」とある。他人の論文や本を読みくらべて、A の方がよいらしい、B の方は間違っているらしいと、上から品さだめする姿勢で臨んでいると、新鮮な事実と直面したときに、心の底の方でキラキラと光る、研究にだけ感じられる喜びを、生き生きと受け取ることはできないだろう。

[21]—(v) *um* について

大野は日本語の *mō* の用法とタミル語 *um* の用法がかなり細かいところまで平行する事実

をあげて詳細に論じた。山下氏はその事実を紹介している。ところがこうした um の用法は、類型論的にサンスクリットにも「…ca…ca」の形で存在し、チベット語には yañ または kyañ で見出されると述べて山下氏はいう。

「上に指摘したような類型的な照応の諸事実をたてに、タミル語“um”と日本語「も」、チベット語“yañ”と日本語「や」、チベット語“dan”と日本語「と」などに逐一同系関係を想定していたら、系統論に收拾がつかなくなり、しまいには説明不能になってしまうであろう。こうした類似は、言語類型論でいうところの“膠着語的”(agglutinative)な性質をもつ諸言語にとって普遍的な何ものかに由来する、タイポロジカルな並行現象と見る方が現実的なのではあるまいか。この場合、言語の類型的特徴の一致が系統関係とは必ずしも結びつかないという事実も、言語学の常識として、改めて言うまでもない。」

山下氏はここで、そんなことは「改めていうまでもない」言語学の常識だという。その通りである。それでは、タイポロジカルな平行現象と系統的關係の相違はどこにあるのだろうか。系統研究には「音韻の対応」という旧式な、しかし強力な方法を使う。そこが違う。大野が語彙の比較につとめたのは、タミル語と日本語との間に、どんな“音韻対応の法則”が成り立つかを厳密に確定したいと考えたからである。やってみるとタミル語と日本語との間には、音韻の対応が多数成立し、成立する対応の中には m~m の対応が存在する。そこではじめて um と mö, mu との比較が価値を持つ。um の u の脱落、mö, mu における ö, u の添加。その変化の原因は、タミル語の CVC体系と日本語の CV または CVCV 体系にあること。その類例として in と nö, ni があること。そうした理解があつてはじめてタミル語 um と日本語の mö, mu との対応が、比較言語学的に有効となる。チベット語と日本語の間に、音韻対応の法則は成立していない。だから dan と tö との音の近似があつても、それは偶然のものとしかれない。タミル語と日本語の間には、単語の音韻と意味との対応があり、助詞の音韻の対応と用法の対応とが兼ねて証明された。チベット語と日本語の間には音韻の対応の法則は成立していない。その両者の関係を混同して論じてはならない。

また、山下氏はチベット語の yañ と日本語の「ヤ」を平行するとしている。山下氏は「長田氏や山下氏や児玉氏は…」という使い方のヤを思い浮かべて、この部分をお書きになったのだろう。しかし、この日本語の「ヤ」は、ヤにとって本質的な用法であつたかどうか。ヤは本来何だったのか。ヤの本質的な意味の、どこから、いつごろから、並立のヤの用法は出て来たのか。そうした説明の用意がないならば、山下氏の yañ とヤとの対比は単なる思いつきにすぎないことになる。ヤについては『係り結びの研究』(岩波書店1993)に74ページにわたって、大野は書いている。それが多分山下氏の考察のお役に立つだろう。

大野は山下氏の助詞の論を拝見して思う。山下氏は Emeneau, Rajam その他の学者の論文を数々引用して、西欧あるいはインドの学者がこう言っているのだから、大野の論はダメなものだという方向へ導く。しかし、伺いたいのだが、山下氏は、それらの学者の論はどこまで正しくて、どこは間違っているのか、御自身で検証なさったことがあるのかどうか。

助詞や助動詞は用例が非常に多いものである。だから大野は山下氏に要求してもよからう

と思う。すべて particle, verbal-suffixes など、つまり日本語の助詞・助動詞に当たるものについて論じられるときには、御自身で in の用例、um の用例等々、対象とする particle, verbal-suffixes の用例を最小限100例ずつをまず古典からお集めになって、それを用法によって、意味によって分類し、その結果を大野の見解とつき合わせて論評して頂きたい。A がこう言っている、B がこう言っていると学者の言葉を引用なさるけれど、彼らのいうことが正当か正当でないかは、そういう山下氏自身の分析結果を持つことによってはじめて評価できるものである。他人の研究を広く読むことも一つの勉強である。しかしいろんな人がいろいろなところを、ただ並べることは実は研究ではない。なまの材料を自分で処理した結果を自分に備えることによってはじめて他人の研究を理解し、批判できる。このように立ち入った発言をなさる山下氏は、その用意をお示しになるべきである。

日本語の万葉時代の助詞と、タミル語の B. C. 200年—A. D. 200年という Sangam の作品の助詞の比較をした人は今までいない。大野とその協力者 Sanmugadas 夫妻はそれぞれに何十、何百という用例を蒐集し、分析し、そしてそれを含む例文を比較した。その結果を報告している。はじまったばかりのこの研究は未熟なものだ。そこには当然あやまりもあるだろう。しかし、実はインドでも、タミル人の間でも、Sangam の助詞・助動詞の意味と用法の研究は、意外なことにまだそれほど進んではいない。大野の報告の中には山下氏も認めたような in と nō, ni に平行現象があり、音声形式にも対応がある。それは新たに分ったことである。それに対し、山下氏はみずから手を下しもせず、あたかもレフェリーのような姿勢で発言される。1993年、Kothandaraman 教授が来日されたとき、いろいろ討論をした。大野は実例を示して、in と nō, ni; um と mō, mu を説明した。その時に、彼は説明を聴き終るやこういった。“It's clear. It's fine.”

[22]—(vi) oṭu について

山下氏は「oṭu は日本語の「と」と比べ、用法がはるかに広範であって、意味的にタミル語 oṭu と一対一に対応させることは困難である」という。山下氏は oṭu と日本語の「と」の例をどのくらい蒐集して、分析なさった上で発言されているのか分らないが、大野と協力者は、oṭu について多数の例を分析した。しかし、その結果は「…と共に、…と一緒に、…をもって」というような意味で、日本語の「と」とほぼ相覆うという結果を得ている。山下氏御自身はどのような例を “genitive, accusative, instrumental, dative, locative, enumerative” と分類されたのか、その結果として「広範」な用例とは何の、どの例によるのか。その用例を明示していただきたい。その上で Rajam のいうところを、吟味してみよう。

[23]—(vii) atu について

タミル語 atu, attu と日本語の助詞 tu との対応を大野が何故詳しく記述したかといえ、日本語の tu は8世紀までは広く使われ、現代語に訳すれば「の」に当たるが、9世紀以後になると急速に衰え、ついに使われなくなる。8世紀の用法では自然物の位置、上下などの位置や、時など、自然界のものについての使い方がほとんどすべてを占めている。それは亡びる前兆として用法が狭くなって来たのか、それとも本来的に狭い用法のものだったのか。tu は、助詞「の」に比べて分りにくいとされて来た助詞である。

日本語の *tu* よりもインドの *atu*, *attu* の方が使い方が広い。しかし、自然物を承けるという重要な点が日本語の *tu* と共通だということは、注目に値する。ところが、山下氏は *attu* は irrational nouns を承けるものであり、それは「大野の所謂自然界の存在」に当たるといふ。「従って大野氏の指摘はある意味で当然であり、言わずもがなのことなのである」といふのが *atu*, *attu* についての批評の結びである。

しかし、日本語の *tu* が、タミル語の *atu*, *attu* と対応すること。*tu* の用法の狭いさまは、*atu*, *attu* が持っている用法と対応する (*atu*, *attu* の方が広いが) ということ、これまで誰が指摘したろうか。まず日本語の *tu* とタミル語の *atu*, *attu* を取りあげ、その対応を認めた上で、両者の間の相違を明らかにして行くのが研究の進め方であると大野は思う。それを「言わずもがなこと」という姿勢からどんな新しい世界が切り開かれ得ようか。

[24]—(viii) *akam* について

これについては山下氏が自分で *akam* の例を100例ほど集め、その用法を分類して御覧になることをおすすめしたい。それと日本語のガの用法とが、いかに近似し、どの点がちがうか御研究願いたい。その上で発言して頂くとよいと思う。タミル語の方が言語の古い歴史を保っており、名詞から助詞への移行行きをはっきりと把握される。日本語は8世紀以後の言語資料しかないから、ガの由来はたどりにくいが、故石垣謙二氏以下の学者は、何千というガの用例を集め、用法の展開を跡づけるために腐心されている。

[25]—(ix) *tu* について

すでに、Zvelebil が、1990年の “Dravidian Linguistics—An Introduction” の中の Dravidian and Japanese の章で、日本語の *tu* のことをかなり詳しく述べている。

[26]—(x) 助詞のまとめ

すでに繰返し述べたが、全体として山下氏は自分で用例をタミル語と日本語にわたって採集し、分析し、用法を自分で明確に把握して比較するという作業をなさっていない。採集、分析、考察を経て、自分なりに把握したものを持ってはじめて他人の研究のどこがいいか、よくないかが分るものであろう。

山下氏は二言語の比較において、どんな部分でも「対等かつ平等」に扱われるべきものだとお考えらしい。あらゆる部分に及んで比較が行われ、その近似と疎遠とが明らかにされることは望ましい。しかし、あらゆる部分が一致することを比較言語学では求めている。同系は一致を意味しない。同系が証明された後にも、両言語の相違点、不一致な点は数多く残るはずである。山下氏は同系と一致とは別だということを明確に認識する必要がある。また山下氏は「同系」について次のように発言している。

これでは日本語がタミル語と同系であることにはなり得たとしても、逆にタミル語が日本語と同系であることを証するには何の用も為さないという矛盾した事態を招来してしまう。(p. (43)—3行目)

同系とは「音韻の対応」に支持されて成立する。「対応」とはA言語とB言語との間に成立する関係概念である。Aだけに成立してBに成立しないという対応はあり得ない。AにとってBは同系で、BにとってAは同系でないとは何ということか。

[27] p. (43) — 1 行目 — (i) 語根 **paṭ-** と **fat-** の対応

これから先は名詞の問題に入るのであるが、ここに至って、山下氏と大野との研究の姿勢の相違が明らかになる。大野は極めて素朴に文献上の事実に対処して行く。TL に次の記述がある。それを日本語と比較する。

タミル語	paṭam	意味：布、旗、風 (TL 2431)
日本語	fata	意味：布、旗、風

日本語の *fata* を説明しよう。

- ①「布」の意。 織らすはた (古事記歌謡67)
- ②「旗」の意。 大海の豊旗雲 (万葉15)
- ③「風」の意。 方言：青森、岩手、秋田、長崎など。

二つの言語の間の音形と意味の共通という事実を大野は重視する。何故なら対応する音形を持つ単語がこのような三個の意味において一致することは偶然にはなかなか起きないからである。つまりタミル語 *paṭam* と日本語 *fata* は対応語であると先ず考える。ところが山下氏の認識はちがう。*paṭam* はサンスクリット系統の言葉だと TL にある。だからこれをタミル語の仲間に入れて考えるのは筋違いだという。

しかし、タミル語の最古の文学作品 *Sangam* (B. C. 200～A. D. 200) につぐ、*Cilappati-kāram* 27:152 に、*paṭam* は「一列に並んだ、なびく旗のある長い城壁」という文脈で使われている。「旗」というような普通の観念の言葉は、——もし、たといサンスクリット系であったとしても——日常語に入って使われるのは、極く自然なことである。それが日本語と対応することもあると思う。大野はタミル語と日本語との関係が生じたのは、数千年前というように古くは考えてはおらず、かなり近い時代、およそ2500年前くらいと見ているからである。それに、布・旗・風という三つの意味の一致を大野は偶然ではないと重く見る。それをただ、機械的にサンスクリット系だと非難するのは、表現の実状を見ないものであると思う。

この場合、*paṭam* がサンスクリット系統の単語であるか否かについては、一応留保しておこう。むしろ大野が強い印象を受けるのは、タミル語の語根 *paṭ-* と日本語の語根 *fat-* との対応である。

	タミル語	日本語
DEDR3852	paṭ-u (初) [paṭumaṇai 初雨など]	fat-u-yuki (初雪など)
DEDR3852	paṭ-u (果つ)	fat-u (果つ、死亡する)
DEDR3852	paṭ-u (舟が停る)	fat-u (泊つ、舟泊て)
DEDR3856	paṭ-ukar (畠 <稲を生ずる所>)	fat-akē (畠・畑、農作地)
DEDR3859	paṭ-uvan (発疹)	
TL 2441	paṭ-u (酒)	
TL 2441	paṭ-u (花房、果実の房)	fat-a (哺乳類の「母」〔青森方言〕)

これを見れば、タミル語の *paṭ-* という語根は、日本語 *fat-* と対応している。この語根の意味は重要である。重要な点は、「季節の初め。元気を生み出すもの (酒)。穀物を生み出す

場所（畠）。発疹（おでき）。生まれ出たもの（花房、果実の房）」という「生まれ出る」の意が共通にあること。それと共に「（舟）の停泊」「事の完了、終了、死亡」までが一つの paṭ- という語根に含まれていることである。出生と停留と死亡とが、どうして共通の語根から分出しうるか。大野の問題はそこだった。これについては、十年以上課題として考慮の中にあった。その結果、到達した考えは次の通りである。

まず植物を頭に置いて考えると分ってくるようだ。今日の我々は「芽が出ること」「花が咲くこと」「枯れること」を全く別々のこととして認識しているが、古代のタミル語社会ではそれらを一つのこととして把握する思考の仕方があったのだ。それは動物でも本質的に同じである。「生命を得ること」「この世に生きていること」「死ぬこと」を同一の事ととらえる見方があったのだ。それを paṭ- で表わしていた。我々は今日、生まれ出ることと死ぬことは全く別のことと思いついでいるが、古代タミル人は直観的に、生命の発現することと、生命を保っていくこと、死に至ることは、いずれも「生命の活動の一樣相であり、活動そのものである」と考えていた。paṭ- はその表現なのではないか。あるいは、それらは生命の成り行きの一つで、出生と生命の持続と死亡とは循環して尽きない生命の動きのひとつの現われだと思っていたのではないか。その成り行きを、paṭ- という語根でとらえたのではないか。

タミル語と日本語との間にその語根の対応があることは、その考えを日本語も受け入れていたことを意味する。日本語の「初」「はた（哺乳類の母親）」「泊つ」「果つ（死亡）」は、出現・出生・停留・死去であり、その語根 fat- はそうした「循環としての生命」の具現のひとつまでであるという把握を意味する言葉だったのではないか。

そう考えると paṭam（布）、fata（布）という単語は糸を織って生み出すこと、生み出されたものとして、この paṭ の仲間に加わるのではないか。大野はそう考えている。

[28] p.(45)―(ii) 三層的世界把握の問題

これは典型的なサンスクリット語の問題である。amarar という形は、知る人にとってはサンスクリット語と一目で分るような「不死」を意味する単語であるという（吉田敦彦氏の御教示）。大野がそれを知りながら何故 amar をアマ（天）として取り上げたか。

ヨーロッパに広まっている世界の三層的把握はアルタイ系諸民族にもあり、天・大地・地下の区別は明瞭である。アルタイ系の言語では、大地を na といい、日本語の na（大地）と共通である。だから三層的把握はアルタイ系の観念だと大野は思っていた。ところが「天」については、モンゴル語、満州語などでは、ten, tengri など ten という型の単語を用い、日本語の ama とは全く異なっている。そこに問題の余地があった。

ところがタミルにも世界の三層的把握があり、大地は ñalam といい、日本語 na との対応を認め得る。その上、amarar（天）という形は日本語の ama とよく対応し、アルタイ系説の ten の欠乏を補うに足りる。amarar はサンスクリット語 amara に由来するのかもしれない。しかし、別にタミル語には amar という語幹がある。amar は（静謐な、出来上った）という意味のタミル語である。天国を静謐な場所として把え、amar をそれに擬することは不可能であろうか。あるいは、サンスクリット系の amarar の語は、非常に早い時期からタミル語に入っていて、他のタミル語と共に日本に持ち込まれたことが、もしかするとあった

のではないか。こうした推測は不可能だろうか。考えてみると、このような由来の単語を、タミル語 = 日本語同系論の初歩的な議論の場に参加させたところに問題があるかもしれない。このような単語の一つや二つ、いや、もっと多くが欠けても、それがタミル語 = 日本語同系論そのものに何も関係することはないのだから。

しかし、アイヌ語の中に日本語の *kamu* (神) の変形と思われる *kamui* が入っている。アーリヤ語の *sumeru* (最高の) は日本語の中に *sume* (皇)、*sumera* (皇) の形で入っている。こういう神とか、最高とか神々のいます天国とかいう概念は、古代社会では意外に速く、広汎に伝播するものだという印象を大野は持っている。それがこの *amarar* の場合にも働いている。

[29] p. (47) — 5 行目。cītai について

山下氏は、cītai の例が Tivviyappirapantam の Periyārvār に拠っていることを非難している。これの作者は10世紀ごろの人であるという。

大野が第一に考えることは、こういう現在わずかししか例の見出せない単語が文献的に古いか新しいかということではない。その単語がどういう文脈で使われるものかということである。cītai は TL に small ball cakes of rice flour とある。「米」が材料である。文例は、

cītai kār eḷḷin uruṇṭai

シトギヤ 黒イ 胡麻ノ 丸イ菓子 [ヲ神ニ供エタ]

というもので、この cītai は神様に供えるものだというのが、M. Sanmugadas の説明であった。大野は単に、言葉の意味を辞書で見るだけでなく、タミルの農村生活を生きた人からその用途をきく。生活の場ではたらく言葉の姿を捉えようとするからである。その種のことは TL にもほとんど書いてない。まして DEDR などには、そんなことは省かれる。この用法に対して日本語のシトギの意味はどうか。

日本語の *sitogi* は平安時代の和名類聚抄に「粢餅、之度岐^{シトギ} 祭餅也」とある。方言には、

神に供える団子。米の粉で作る。 青森、岩手、秋田、福井、愛知、鳥取、島根、広島、熊本

神を祭るときや棟上げに投げる餅 埼玉 (秩父)、島根、山口、鹿児島

など多数がある。ここで日本語シトギに、「祭餅也」とあること、それは現代の方言としても日本中に広まっていること。それが cītai においても「神に捧げる米のケーキ」であること。大野はそれを第一に重視する。山下氏は用例の文献的年代が「新しいかどうか」を重んじる。7000キロも、2000年もへだたった二つの言語の比較を扱っているのだから、比較文化的な感受性を、言語比較においても大切にされた方がよいのではなかろうか。

ちなみに言えば、TL は農業関係の単語の説明において弱いことが多い。それは各所に見られることで (一例をあげれば *tampal* [田んぼ]。後出「問題の語と語義」の (47) を参照)、これは TL の弱点の一つなのである。そうしたことも心に入れて TL を使う必要がある。

[30] p. (47) — 21 行目(i) “*kucci*” について

山下氏は *kucci* か *kuccu* かについて細かく論じられた。日本語としては *kusi* も *kusu* もあり、*kusu* の方が古いかもしれない。しかし語根の段階では同等と軽く扱ったのは、丁寧

さを欠いた。語根 kucc- は小さいもの、少しのもの、短いものの意である。日本語のクシ、クス共通が分るような例をあげておく。


クシ	串・梳・櫛	類聚名義抄
クスヌク	搥・撓	類聚名義抄
	「刀の山にクスヌカレテ」	東大寺諷誦文稿

[31] p. (47)―37行目。vēl について

山下氏は言われる。タミル語 vēl については、何を見ても武器としての vēl 「槍」以外はないにもかかわらず、大野はそれを、土を掘りおこす「犁^{すき}」の類としている。武具 vēl と農具「犁」とはかけはなれている。それを日本語の「ヘラ」と関係づけている云々。また、大野の説明が一貫性を欠くとして論難がなされている。

こうした道具類については、遠隔の地では同じ名詞が、具体的にはかなり異なるものを指すことはしばしばある。だから、詳しく述べる必要はないと考え、大野は基本的な点の共通点さえあればよいと扱って来た。ところが山下氏は「vēl は「槍」で、それが犁とされるとは」と述べている。尤もなことで、詳しくきちんと記さないことがいけなかった。大野が大切と見たのは、「切先が扁平の道具で対象を突くもの」ということであった。

改めてここで vēl が日本語 fera に対応する言葉だということを説明しよう。

問題は二つある。①は、山下氏が vēl の「槍」をどういうものと認識しておられるかである。vēl とは、トランプのスペードの柄の部分^{スピア}を長くした形の武器で  という形をしているものである。その先端は鋭いが扁平である（「槍」とだけ訳している山下氏の認識はどうであるか分らない）。②はヘラというとき、現在の日本人は多くは糊を塗る竹製の小刀型のものを思い浮かべる。あるいは左官屋の人が壁の仕上げに使う平らな道具。ところが鎌倉時代の漢和字書、類聚名義抄に、次の4例がある。いずれも金偏がついているのが注目をひく。

ヘラ 壁（僧上134）鐸（僧上137）鉏（僧上138）鋤（僧上139）

ただ遺憾なことに、諸橋大漢和辞典をひいても、上の4字の中でただ1字、

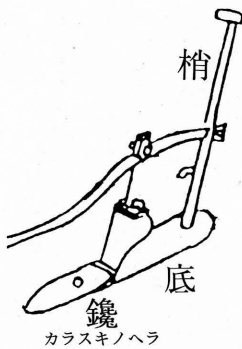
壁 ミガク、トグ

があるだけで、他の3字は掲出されていない。しかし、壁は鐸と同字だろうと思われる。鐸ならば後世カラスキノヘラとするものがある。いずれにせよ、この四つが金属の道具であることはたしかであろう。そこで『日葡辞書』を見ると次の通りである。

Fera ヘラ（鎧・鐸）犁（からすき）の刃にくっついている、幅広の反り上った鉄であって、土の塊をひっくり返すためのもの

つまりヘラはカラスキの先端の平らな鉄の部分で、その鋭い先で土塊をひっくりかえす役をするものだという。絵入りの百科事典である『和漢三才図会』第三十五農具類を見ると、次の説明がある。片仮名の振り仮名は原著のものである。

増額ニ曰ク柄^エノ曲リタル木ヲ耒^{ハシ}ト曰フ。耒^{ハシ}ノ端^ハノ刃^{ツク}ヲ耒^{ハシ}ト曰フ。耒^{ハシ}ハ本ノ金也。枳名ニ云。犁^{ヒラ}ハ利也。土ヲ斃^キキ草ノ根ヲ絶^{ツク}ツ也。金ヲ冶^{カラスキノヘラ}テ之ヲ為^{ツク}ル。犁^{ツク} 鐵^{ツク}ト曰フ。木ヲ断^{ツク}リテ之ヲ為^{ツク}ル犁底ト曰フ。



つまり、犁の柄の先の平らな底の、その先に鉄でつくられた平らな鋭い部分を鑱カラスキノヘラと言っている。

同じく江戸時代の『書言字考節用集』を見ると、

鑱カラスキノサキ 鑱カラスキノヘラ 犁耳 同
とある。だから鑱は、「カラスキの底の部分の先端の平らな金具」といってよいだろう。それによって、土くれをたがやし、小さくくだいて田んぼの土をはぐす。平安時代の色葉字類抄にも「鑱」「鉏」にヘラとあり、それは犁（カラスキ）と共にある旨が書いてある。

ヘラといえば、竹で作ったものも古来ある。しかし一方では以上に見たように農具としての金属製の道具の一部分もヘラであった。その「金属の部分は、柄の先についた、平らな鋭いもの」という点で *vēl* と同じ形態と機能を保っている。山下氏は語気鋭く論難せられるけれども、以上の考察を経て大野はタミル語 *vēl* と日本語 *fera* とを対応語と見なした。

同じように、山下氏のタミル語についての認識の不足と、TL の記述に対する評価の偏りによって導き出され、問題とされたものがある。山下氏が事こまかに難詰された *poṅkal* と *paṭukar* がそれである。

[32]—(iv) *poṅkal* について

山下氏は *poṅkal* という語について数々の例をあげ、大野の見解に強く反対せられた。大野は山下氏の記述について、四つの点を指摘したい。

(1) 山下氏は *poṅkal* という言葉がサンガム時代には、「お粥」の意味ではほとんど現われず、「雲が湧く」とか「立ち昇る」とか、「たくさんに」とかいう意味で使われるものだと強調している。ところが、「お粥」の意味で *Cilappatikālam*. 5. 69 に例がある。

Pūvum pukaiyum poṅkalum corintu vārtti
花モ 香料モ オ粥モ 撒キ散ラシテ 神ヲ称エタ

この例を山下氏は知っているのに、あえてこれを否定して、ほとんど例がないといい、それを根拠に *poṅkal* の祭りの存在自体に疑義を表明している。

古代語を資料とする研究を展開するには、「たった一例」でも明確な例があるときには、それを重んじなければならない。一例でもあれば、その単語はその社会で市民権を持っていたのであり、それが指示する「事実」が存在した。その市民権を抹消することはできない。*poṅkal* が指すお粥が「豆御飯」か「小豆御飯」かは問題にならない。いずれであれ、炊いたお米の食べ物は存在した。それを否定するところに山下氏の誤りがある。

(2) 大野は南インドのポンガルと日本の小正月の行事とを対比した。そこには十数項目に及ぶ行事の平行が見出される。それは『日本語以前』『日本語の起源（新版）』にも書いたので、ここには再記しないが、その行事の中で、日本では *honga honga* ; *hongara hongara* と呼び、叫ぶのに対して、タミルでは *poṅkalō poṅkal* と叫ぶ。音韻上、この言葉は見事に対応している。この事実に対して山下氏は古い記録がないという一点を根拠に否定的評価を与

えた。大野の見解によれば、7000キロを隔てた、2000年以上離れている南インドと日本とに存在するこうした共通な事実は、その昔、南インドにこの祭りがあって、かつタミルと日本との間に何らかの交通がなければ、偶然では生じない。この場合、古い記録などは全く必要でない。文字の使われ始める以前にその関係が生じたのだろうと大野は推測する。推理とは、不足な、わずかの材料によって、大きな事態のなり行きを直覚的に見透かすことである。研究とは、その推理を、多くの資料によって、人々が納得できるように明証することである。poṅkal と hongara という一対の対応は重要な意味をもつ。

(3) 山下氏は多くの文章を並べて、ポンガルの行事が、タミルナードの民族の尊厳の象徴として政治的な意味合いが付与されているという。しかし、先年大野はタミルナードの隣のケララ州に行き、トリバンドラムに泊まったことがある。タミルにおける poṅkalō poṅkal は、ケララでは、poṅkalā poṅkal というとのことで、それはそのまま、江戸時代の信州の農民の叫び声と同じであるとホテルの人たちと話し合った。poṅkal はケララでも大事な祭りだった。また、カルナタカ州でも poṅkal を行くと、Nagaraja Rao 教授が大野に語ったことがある。poṅkal の祭りは、タミルだけの祭りではない。

(4) 山下氏は poṅkal という言葉に、その祭りを指す例がないから、祭りそのものがなかったという主張へと論を展開している。その思考は poṅkal という言葉を実体化し、それだけが poṅkal の祭りの存在証明になるとする思考である。しかし、poṅkal の祭りの存在の証明は、“poṅkal” という言葉以外の表現によっても可能である。

長いので原文は省くが、サンガムの一つに「粟ノ新穀ヲ嘉キ日ニ初メテ食スルタメニ、森ノ牛カラシボッタ牛乳ヲ鹿ノ肉ノニオウ甕ニ入レテ、香り高イ薪デ炊イタ御飯ヲ……」(Puraṇānūru 168) とある。「新穀を嘉き日に初めて食べる」とあるから、これは正月の poṅkal の行事である (1983年、Sanmugadas 教授による)。

poṅkal の祭りには、さまざまな遊び、競技が行われる。その中に、牛に縄をかけてとらえる競技がある。それに成功した若者は、Hero となり、多くの若い娘のあこがれの対象となる。それは今でも地域によっては行われるポンガルの競技である。下掲の歌は、その Hero があまりに強く恐ろしいので、牛飼いの娘は、来世に生まれかわっても、その Hero に抱かれたいとは思わないだろうという歌。つまり、この歌によって現代の poṅkal の日に行われる競技が Kalittokai の時代にも行われたこと、つまり、盛大な poṅkal の祭りが行われていたことの傍証とすることができよう。

Kollērruk	kōṭaṇcuvānai	maṛumaiyum
恐ロシイ牛ノ	角ノ (ヨウナ) 恐ロシイ人 (ヲ)	来世デモ
pullālē	āyamakaḷ	Kali. 103 : 63
抱カナイデショウ。	牛飼イノ娘ハ	

[33] p. (5) — 9 行目以下。paṭukar について

paṭukar については、語根 paṭ- と fat- の項(34・35)ページですでに一部分言及しているが、ここでは山下氏の発言の順序に従って大野の見解を述べることにする。

山下氏はここで単に paṭukar という単語一つを問題とせず、大野の辞典使用の態度の一

例としてこれを取りあげ、批評を展開された。大野は「都合のよい語彙や語義だけを抽出して、それを特定の時代と結びつけるような初歩的な過ちを犯し兼ねない」とある (p. (50)~(51))。まず、この部分について。

ここには、区別されるべき二つのことが混同されている。山下氏は大野が「都合のよい語彙や語義だけを抽出」するのは初歩的な過ちだとされた。だが比較言語学の場合、「語彙」と「語義」とでは事柄が全くちがう。遠くはなれて何の関係もないと思われている二つの言語に、関係があると提言するのだから、語彙の中から、「対応関係の立証に役立つ単語」を抽出するのは当然のことで、どのような単語を提出しようと、音韻と意味に対応があるならそれがとがめられる筋は全くない。とがめられるべき問題があるとすれば「語義」の扱いである。単語の中心的な意味から逸脱した特殊な意味を一般化して、比較の材料とすることは、誤りになることが多い。「語義」は都合のよい所を使うだけでは不可である。それと「語彙」との区別が山下氏において気付かれていない。

「大野氏のアプローチには、そのような学問的な姿勢を疑わせるような場合がしばしば見受けられる」という。その「わかりやすい例を引いてそのことを示す」ための一例として“paṭukar (rice-field)”が選ばれた。山下氏のこれに関する論述は2ページ半にわたる。大野に対する論難の要旨は次の通りである。

- (1) TL は chronological な語義配列に考慮を払っている。
- (2) それが不可能な場合には、論理的な順に、「すなわち意味論的に、より根源的、基本的と見なされ得る語義から順番に掲げられている。」
- (3) paṭukar の第一義は“path of ascent and descent”である。これは最も古い語義で8世紀前半から、12~13世紀の間に位置する古辞書に載っている。そしてサンガムの Pattuppāṭṭu にも例がある。
- (4) 第二義は“pit, hole, hollow”で、8世紀前半の Tivākaram が出典としてあげてある。
- (5) ようやく第四義にいたって“rice-field”がある。これは Winslow の1862年の辞書を出典としている。それは「古文献に出典が求められなかったからであろう。」
- (6) 第五義として“agricultural tract”がある。その出典は「中世後期、場合によっては18世紀ころまで成立が降る可能性もある。」
- (7) このように TL は大筋において時代の順に語義が配列され、語義が準拠する出典が選出され、かつ（注意深く読めば）記述の信頼性などまで暗示される仕組みになっている。
- (8) タミル語の単語の語義を選択する際に大野は多分に恣意的である。
- (9) どの辞典にも見出し難い語義が掲げられている。
- (10) 語義の提示が意図的に操作されているのではと勘ぐりたくなるものすらある。

以上が paṭukar (rice-field) を例とする山下氏の批判あるいは警告の要領である。

この警告は古代語研究、ことに比較言語学に従事するものが誰でも一般的に犯しやすい過ち、あるいは陥りやすい罠に対する警告である。大野も研究者の一人として、これに従い、用心しなくてはならない。

しかし山下氏の TL に関する認識に対しては大野はたやすく賛同できない。それを〔第一〕とする。次に paṭ-ukar 一語に限って言えば、山下氏の TL に対する認識の誤りが、どのような外的論述を導いたか、それを〔第二〕としよう。以下その二項目について記述することにした。

〔34〕 TL の意味の配列

〔第一〕 (1) TL は手本として Oxford の NED を持ち、それを目指していた。だから語義を chronological に配列しようとしたことは当然である。問題はそれがどの程度に個々の単語について実現しているかである。山下氏の TL 認識を確かめるために、まず氏のいう TL の序文を顧みよう。

単語の意味の配列について TL は次のように書いている。

- (i) Where chronological arrangement is possible, it is followed.
- (ii) Where it is not possible, a logical arrangement is followed; but this is modified by the principle of arranging the meanings in the order of comparative familiarity in usage.

大野の推測によれば、山下氏は辞書の編集——一語一語の項目を書くだけでなく、全体として辞書を編集するという作業——の経験をお持ちでないらしい。大野は『広辞苑』（初版）のために、日本語の基礎語1000項目を選んで、上代から現代までの語義の変遷を用例と共に書いたことがある（1954年）。その後『岩波古語辞典』のために2万語を扱って20年を費やした（1974年刊）。1995年には現代語の52000語の辞書『角川必携国語辞典』を出版した。現在も古典語の一語一語を扱う作業をしている。英語には Lexicographer（辞書編集者）という単語があるが、大野はほぼそれに当る仕事をして来た。山下氏との間にあるその経験の差が、TL の基本方針の文章の読み方、TL の内容の把握に相違をもたらしている。

TL の編集長は正直に書いている。“Where…is possible,”「年代的に配列出来るときはやります」という。「年代的に配列することができないときは、logical な配列をします」という。ここにある“logical な配列”とは何だろうと辞書編集の経験者なら誰でも戸惑う。すると、その後にも、ちゃんと逃げ口上がついている。“but this is modified…”これを見て大野は思わずにやっと笑ってしまった。この人は正直な人だ。「Logical にできないときは、その方針をやわらげ、部分的に変更して、比較的良好に使われる順に並べておきます」という。大野はしばしば経験しているが意味の発展としては $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ と行きそうに思われるのに、実例としては C の例の方が B より前に現われ、B はむしろ C のあとに出てくるなどのことがある。だから TL の編者もそれを知っていて (ii) の文を加えたのだろう。「原則」とは理念である。われわれは、それを現実の具体相と見なしてはならない。

辞書が chronological に意味配列できるためには

1. 材料がそろっていないとではない。
2. 古代から現代までの作品がどれでも読める原稿書きがいなくてはならない。
3. その人は単語の意味の展開、心理的な変化の観点からも、文化との関連においても、文脈の実例からも把握できなくてはならない。

現在の日本では万葉の語釈研究を公表できて、同時に源氏物語の語釈研究が公表できる学者は非常に少ない（昨年亡くなった佐伯梅友先生は両方にわたる注釈をなさった）。ましてや近松・西鶴までに及べば到底いない。それだけ学問が細分化されたわけではあるが、学者の眼界が小さくなって来たことも否めない。

インドでも Sangam が精しく読める学者は極めて少ないと大野は感じている。材料に関していえば、TL を作った1920年代にはタミル語の作品の concordance がほとんど無かった。材料はひどく不足していたのである。

それに加えて10万語を扱う TL は当然、大勢の寄り合い書きである。寄り合いで辞書を作るときには、中心によほどよく言語を把握した人がいて入念に統制しないと、出来上りにバラツキが出て、とても統一はむづかしい。

具体的に一例をあげよう。『大言海』は、大槻文彦先生の手によって生前にアカサ 3 行（第二冊まで）は成稿に至っていた。第三冊は大体出来ていた。第四冊分はまだほとんど手がついていなかった。そこで若い学者を集めて第四冊を作りあげた。もし人が、『大言海』の第一冊と、第四冊とを読みくらべて見れば、誰でも個々の項目の解説の出来栄え、達成度について、その 2 冊の間の落差の大きいことに気付き、事情を知れば驚くだろう。

つまり chronological に、またいうところの logical に語義を記し、配列できるためには、それだけの多くの作品を読みこなした力量のある学者が多数いなくてはならない。ところがそうした学者を大勢そろえることは到底できない相談である。

タミル語の辞書でいえば Winslow の辞書は、著者の力量が感じられる辞書である。インド滞在38年に及んだという Winslow が一生を投じた迫力を大野はその辞書に感じる。TL の序文によれば、TL は Winslow の記述をまず下敷きにして作業をはじめた。用例を加えること、その他の手入れをすることは必要な仕事であっただろう。しかし寄り合いの学者が手を加えたために、かえって Winslow よりも TL の方がわるくなったと思われる項目もある（例えば kottai の項を読みくらべてみれば、大野のいうところは瞭然となるだろう）。

語義を用例とともに chronological に配列することの実際的な困難を経験している故に、大野は現在の TL の語義配列を極めて重視する山下氏の(1)、(2)の発言には賛成しかねる。使用してみても、TL がそのように出来ていると思われない。Kothandaraman 教授も TL の語義配列の 6 割または 7 割くらいが chronological にできているだろうといわれたことがある。つまり、三つに一つはうまく整っていないことになる。

[35] paṭukar の意味

[第二] 次に山下氏の発言(3)である。山下氏は TL の語義の順序に従って paṭukar の意味の展開を次のように考えている。

- ①path of ascent and descent （あがりさがりのある道）
- ②pit, hole, hollow （穴み、凹地）
- ③tank （インドでは「溜池」）
- ④rice-field （稲作地）
- ⑤agricultural tract （農地）

南インドに行ったことのある人は御承知のことだが、南インドでは、低くて水のたまるような場所ならばどこでも稲ができる。川辺の、ちょっと増水すればすぐ流失してしまうようなところにも稲を作っている。水さえあれば稲は育つ。従って②③④⑤は一連の、意味の近似した仲間である。これをまとめて④としよう。すると、①と④との意味的な、logical な連絡は何だろう。どうもうまくそれが意味の発展としてはとらえられないと見るのが自然である。DEDRはこの①の意味を掲載していない。それは Burrow と Emeneau がその連繋的発展を認め難かった結果と思われる。他のタミル語、ドラヴィダ諸語を見ると paṭ- という語根によって、近似する意味を表わすものは次の通りである。

タミル語	paṭu	tank, pond, deep pool (溜池、池、深い水だめ)
	paṭuvam	slushy field (泥田)
	paṭṭam	tank, pond (溜池、池)
マラヤラム語	paṭu	a rough tank (荒れた溜池)
コダグ語	paṭi	swamp (沼・池)
テルグ語	paṭiya, paṭe	small pit containing water (水の溜った小凹地)
	paṭuva	a low ground (低い土地)

DEDRが TL の①の意味を捨てたのはここに挙げた8個の単語(これを⑥とする)を併せ考察した結果、①と⑥とは連絡しないとしたのだろう。

大野の見解では④と⑥とは古くから平行して存在したと思う。察するに山下氏の見解を決定的に左右したのは、rice-field, agricultural tract という TL の訳語は四番目、五番目にあること、それは、後世の、うっかりすれば18世紀のものだという判断である。このように paṭukar という単語の、rice-field (これはインドでは陸田も水田も意味する) という意味の古例はない。にもかかわらず大野はそれを「恣意的」に、「意図的に操作し」、自分の意見に引きつけたというのが山下氏の意見である。しかし大野は paṭukar を比較語彙としてすでに、“Sound Correspondences between Tamil and Japanese” (Gakushuin Univ. 1980) の中に載せている。そして「解釈と鑑賞」の「日本語とタミル語の関係 (連載24)」1984年12月号に次の古例をあげている。

Pūm paṭukal ila vālai pāyum Tēvā. 82 : 2
 豊カナ 水田デ 若イ 魚ガ ハネル

この paṭukal は「溜池」でもいいじゃないかという反論があるかもしれない。しかし pūm paṭukal とある。pūm の m は音の連続のために入った音だから、paṭukal の形容語は pū である。pū は「花」と訳す言葉で、花とすれば水田にある neytal の花だろうとするのが M. Sanmugadas の見解であった。また pū には “richness, fertility, flourishing condition” という訳語もある。だからこの pū は「肥沃なこと」と訳され、文脈から見て paṭukal は「水田」と判断される。

この出典の Tēvā (Tēvāram の略) はシバ神に捧げる祈りの歌。7世紀の作という。7世紀の作とはタミル文学史の中では古いとはいえないが、この paṭukal という形は TL に出ていて、「paṭukar から転じた形」と注がある。してみれば、paṭukar は、この例より古いと

するのが TL の編者の判断である。これは山下氏の重視する Pin. や Tivā. という類語辞典よりも古い。かつ南インドでは Megalithic Culture の時代から稲は作られていた。従って paṭukar を古くないとする判断は誤りといわざるを得ない。

このように「paṭukar は古文獻に出典がない。出典は中世後期以後、場合によっては18世紀ころまで時代が下る」と推定し、それを根拠として山下氏は論を展開された。それと並んで山下氏は TL の時代順の意味配列を強調された。そこに信頼性が暗示されているとして、「注意深く TL を読むべし」と警告せられた。しかし Tēvā. に見える例によれば、paṭukar の水田・陸田の意味の成立は、必ずしも新しいものとはいえない。この場合 TL の語義掲載の順序は chronological になってはいない。つまり、山下氏の TL 記述信奉は、少なくとも paṭukar については訂正を要する。

こう見てくると、先に展開せられた vēl, poṅkal の意味に関する大野への非難、また paṭukar の(6)(7)を具体例として展開された(8)(9)(10)の非難、すなわち大野の語義の選択が恣意的である、辞典に見出し難い意味が掲げられている、意図的な操作があるという非難は、それぞれの単語に関する限り正確とはいいいかねることが判明する。逆にこれは山下氏自身が御自身の発した警告を自分に適用する必要があることを示すものであるように思う。

学者が研究の上で誤ること、間違いをすることは宿命である。それは決して名誉ではないが、訂正されて、更に前進すればそれでよいことである。しかし、学者は「偽ってはいらない」。従って、学説の批判においても、相手に対し「意図的な操作」という種類の単語をたやすく使うべきものではない。以上が vēl, poṅkal あるいは paṭukar をめぐってきわめて多くの言葉を費やされた山下氏の批判に対する大野の見解である。

[36] p. (53)—15行目。uvaṇ などの問題

山下氏は uvaṇ (DEDR557) upper place, place above (上の場所、上方の場所) を日本語 ufa (上) と比較することに異をとнаえている。u は「そこ」「その場所」を示す言葉で、u が「上」を表わすのはタミル語 uvaṇ だけである。他のドラヴィダ語の中には例がないという。タミル語の例は、山下氏の指摘するように、Cīvakaśintāmaṇi に見出される。

Pukai... uvaṇ uytṭiṭa Cīvaka. 2853 : 3

煙ハ 上ニ 昇ッタ

山下氏は u が上方の意を示すのは、uvaṇ だけであると記している。しかし、

umpar elevated spot; higher place; height, elevation; sky, celestial world, paradise [高い所、高さ、空、天国]

という単語が、DEDR の uvaṇ と同じ項目に収められているのはどうしたことだろう。

umpar kōṇ [天国の王であるインドラ] **umpar-āṇ** [天界にいる牛]

umparāṇ [地位の高い人] **umpar-ulaku** [神々の世界]

TL には以上のような複合語もあげてある。山下氏は次のように書いている。

DEDR557 中で、このタミル語“uvaṇ”を措いて [u が上方の意を示す例は] 他のドラヴィダ語 cognate 中にまったく見当たらないのである。

タミル語には、たしかに u が「其処」にあたる多くの用例がある。しかし、TL には次の

説明がついている。

- (a) Base of the demonstr. pron. expressing a person, place or thing occupying an intermediate position, neither far nor near, and meaning yonder or occupying a position near the person or persons spoken to.

- (b) (中略) expressing behind or beyond

つまり、u は、日本語の「そ」に近く、遠くも近くもない中間の位置を示す指示代名詞の語根である。そして「背後」も「越えて向こう」も表わす。それと並んで「上方」をさすこともあると、今から十数年前、Kothandaraman 教授から Madras でお習いした。その例が、uvaṇ と umpar である。

uvaṇ や umpar の「上」「高いところ」という意味は確かにタミル語特有であるらしい。それに対して山下氏は「ドラヴィダ諸語における cognate を広く見わたすべきだ」という。「語形や語義の普遍性と特殊性とを踏まえた上で…」「ドラヴィダ言語学では」と家本氏も児玉氏も書いておられる。しかし、ドラヴィダという名は「語族」の名であって、その中には二十数個の言語が含まれる。大野はそういう「語族」と日本語との比較を自分に禁じた。大野は特定のタミル語を相手として比較研究をしている。

タミル語との比較研究の論文を発表しはじめてから、大野はドラヴィダ語と日本語の比較と一度も言ったことはない。それは一つには、単語の比較の途中に、この uvaṇ のような単語が現われるかもしれないという予測を持っていたからである。相手とする特定の言語だけにある単語あるいは意味が、日本語と対応する場合が一つの問題として意識された。だが、むしろ単語の段階では、対象を広くとって「ドラヴィダ語」とした方が、対応語らしいものを見つける範囲が広がる。しかし、本質的な問題、文法的な比較（助詞・助動詞の比較）に至って、「ドラヴィダ語族」を相手としたのでは、変化の様相が複雑で、到底現実的な処理が不可能となるだろうと大野は予測した。大野のこの予測は日本語の歴史、また日本の方言における助詞・助動詞の多彩な変化についての大野の観察から導かれた。現代日本の方言の文法を一括して「方言」とし、それと奈良朝文法との比較を試みれば、「方言」における助詞・助動詞の複雑な相違の結果、その比較は結局不可能だということは理解できるだろう。大野の見当は外れていなかった。Kothandaraman 教授が「ドラヴィダ語の particle, verbal-suffixes の総合的統一的取扱いなどとてもできない」と語ったことがある。

従って、この uvaṇ をきっかけとする山下氏の「ドラヴィダ語の普遍をふまえて」という発言は、比較研究を自分から試みず、観念の中だけで研究を操作している、氏の姿勢を反映するものといえる。

[37] 批判の結び 山下氏は、大野の研究に対する批判を次の3点にまとめている。

- ①サンスクリットの問題
- ②語義の質の問題
- ③語義の初出の問題

大野はこれまで記述して来たことによって①にはお答えした。これはいかにも大問題のように聞えるかもしれないが、実際の数の上では極めて少ないもの、10例前後である。②につ

いてはむしろ山下氏がタミル語にナイといったものが実はアルこと。山下氏は日本語・タミル語の用意の不足を顧みずにナイと断定する傾きがある。また、直接その単語が使われていなくても、行事としての *poṅkal* の存在などが明らかになった。それは単語と事柄との関係の認識が山下氏において極めて単純な形式主義に支配されていることに基づくものである。

③は山下氏が TL の語義配列を、度を超えて信頼していることに基づく誤りである。氏は「古文献の実例の時期即その物事の存在・行事の開始の時期」と扱っており、歴史的に事実は古いのに、単語は新しいものしかないことが往々あるという認識が浅い。古事記・万葉集から中世、さらにそれ以後の多くの日本語の単語に接していると、文献に現われるのは、それぞれの時代の事実も語彙もほんの一部だということがよく分る。その目から見ると、山下氏が「サンガム時代には、その存在、用例を証明できず、初出の時代がかなり下る」ことばかりを重視されるのは、生活の連続に伴って、言語も連続して行くが、わずかに記録に残るものだけということを手下氏が深く理解しておいででない結果と思われる。

「タミル語と日本語との間に 500 語の基礎語の対応が見られるという。しかしながら、この 500 という数字は恐らく大幅な減少を余儀なくされるに相違ない」と山下氏はいわれる。しかしこれほど多くの紙数を費やして、攻撃論難した大野の単語の中から、山下氏は、いくつの明らかな否定を獲得できただろうか。逆に山下氏の誤謬・研究不足が明白となったものが少なくない。その判定は公平な第三者に待つことにしよう。

加えて山下氏の論評の有効性を吟味するに適当な素材「問題の語と語義」という 53 語の表が山下氏によって提出されたのは喜ぶべきことである。その 53 語の疑義に対する大野の説明如何によって大野の単語が否定あるいは大幅な減少を余儀なくされるべきものか、それとも山下氏の指摘と非難が的確さを欠くのか、およそ判断されるだろう。

最後に重ねて書いておきたいことがある。大野は、考古学の助けによって、それとの混同によってタミル語と日本語との同系を論じていない。言語の同系の立証は言語学的方法だけによっている。それによって証明は成立するという方向に進んでいる。言語の同系の立証の次の問いとして、「その同系性の成立時期はいつか」という問いがある。その問いかけに答えるべく、大野は考古学の領域に踏み込んだのである。考古学に不馴れた言語学者は、大野は言語学と考古学を混同したといい、言語学の知識のない考古学者は、大野は二つの学問の間を迷走したかのように受け取る。

3 p. (62) 「問題の語と語義」について

山下氏は以下の 53 語を具体的にあげて(1)語義が誤っているもの。(2) DEDR の当該の項目からの語義の選択と訳語表現が恣意的に映るもの、を挙げ、問題の部分を下線で示した。(3) またインドアーリア起源が疑われるものは数多く見出されるが、それについては割愛したとある。それについては一部すでに書いたし、家本氏へのお返事の中で詳しく記す予定である。数としては実は 10 例前後であるからここでは論じない。「語義が誤っている」とか「恣意的に映る」とかあるが、それは一覧表を山下氏の目で一瞥せられた際の印象にすぎない。大野

は「解釈と鑑賞」誌に一語一語精しく文献的証拠をあげているのだが、論評された四人はそれをほとんど見ずに、大野の誤りとする姿勢をとっておいでである。すでに長田氏へのお返事として(17)ページ以下に記したように、長田氏が異議をとなえた6語のうち5語は、逆に長田氏の不用意な発言であったことが明らかになった。山下氏の提示した53語がどのような結果になるか。提示された単語すべてについて、タミル語側の証拠と日本語側の証拠とを併せて第三者の判断のために提供することにしたい。

紙面がすでに超過しているので簡潔を旨とする。あるいは説明不足があるかもしれない。なお、「網羅的でない」とか「これらについては割愛した」とか「数多く」という表現が繰返されているが、ここに挙げられた以外の疑わしい例があるならば、公表をお願いしたい。大野はそれにお答えするつもりであるし、今回の説明で納得しがたいと思われる点についても、指摘があれば、追加の資料を公表する用意がある。

(1) タミル語 **kac-aṭu** (DEDR1088): 日本語 **kas-u** (滓)

タミル語 **kac-aṭu** blemish, fault, defeat; dirtyness, doubt; dregs, lees (汚点、失敗、疑い、滓)

この言葉は3世紀の *Tirukkural* にも出て来る。dregs (かす) という文例は未だ見出していないが、DEDR によると、ドラヴィダ諸語の中に次の例がある。

マラヤラム語 **kacci** stubble, rubbish (かす)

カンナダ語 **kasa** rubbish, sweepings (かす)

テルグ語 **gasi** sediment of ghee or oil (脂などの残滓)

このように使用する地域が広い単語あるいは意味は大体古いものである。

日本語 **kas-u** 滓 加須 (かす) 金光明最勝王経音義 (平安中期)

(2) タミル語 **kaṭ-ai** (DEDR 1109): 日本語 **kad-o** (門)

タミル語 **kaṭ-ai** entrance, gate (門)

例。Nāy il viyaṇ kaṭai. Kuru. 277 : 1

犬ガ イナイ 広イ 門

polaṇ kaṭai neṭu nakar. Akam. 325 : 2

美シイ 門ノ 高イ 家

日本語 **kad-o** 門 (標準的にはカド。kaṭai と清濁が違う。-ṭ- は清音 -t- に対応)

例。朝 (あした) には可度 (カド) に出で立ち 万葉4209

kat-u 門 (方言だが、清濁の点で一致する例。)

わが加都 (カツ) の五本柳 (いつもとやなぎ) 万葉4386 (防人歌)

(3) タミル語 **kaṭ-al** (DEDR1118): 日本語 **kat-a** (潟)

タミル語 **kaṭ-al** sea (海)

例。Kaṭal cūr paṭappai. Nar. 38 : 7

浅瀬ノ水ガ 廻ル 庭

日本語 **kat-a** 潟

例。朝風ぎに可多 (カタ) にあさりし 万葉3993

(kaṭal は一般的に sea。文例で分るように浅瀬にも使う。)

(4) タミル語 kav-ar (DEDR1325): 日本語 kaf-a (川)

これについては(17) ページで述べた。

(5) タミル語 kaḷ-i (DEDR1378, TL815): 日本語 kay-u (粥)

タミル語 kaḷ-i gruel, conjee (粥)

例。Uṟuntu talaip peyta koṟum kaḷi. Akam. 86:1

黒豆ヲ 中ニ 入レタ 糊ノヨウナ 粥

タミル語の ḷ は日本語の y に対応する場合がある。mūḷ~moyu (燃ゆ)、tuḷi~tuyu (梅雨・露・少し)、kuḷir~köyu (凍ユ) など。

日本語 kay-u (粥)

例。粥 カユ 類聚名義抄

(6) タミル語 kaḷ-ai (DEDR1373): 日本語 kar-u (刈る)

タミル語 kaḷ-ai to weed, to pluck out (雑草を刈る、むしりとる)

例。Neṭu nīrc ceṟuviṇ kaḷaiṇar tanta neytal. Perumpāṇ.213

深イ 水ノ 田デ 草刈リ人ガ 手ニシタ ネイダルノ花

日本語 kar-u 刈る。万葉集で「刈る」対象は雑草・草・草の根・かや・麻・尾花・こも・柴・玉藻などである。

(7) タミル語 kāl (DEDR1479, TL890): 日本語 kar-a (幹、族など)

これについては(28・29) ページに記した。

(8) タミル語 kōm-āṇ (DEDR2177): 日本語 kam-u > kam-i (神)

タミル語 kōm-āṇ king, lord; spiritual preceptor. (王・主・精神的先導者)

この言葉は本来は kō と māṇ との複合語と考えられる。māṇ は makaṇ (息子) に発するという。つまり、kōmāṇ は本来「kōの息子」であろう。タミル語 kō は TL によると、cow, bull, heaven, sky, earth, ray, thunderbolt as the weapon of Indra, arrow (牛・天空・大地・光・インドラの武器の雷・矢) などである。このように牛は神である。kō がまた天空の光であり、雷であることは日本の kamu (雷) を考える上で極めて重要である。

Sanmugadas 教授は TL の kōmāṇ の解釈は不足であるといった。「superpower をもつ支配者」と考えるべきで、神のような威力をもつもので、かつ領有する王であるという意見だった。その superpower の由来は、kō にあると考えられる。

例。Uyar kō vai taru kō vē. Ilakkaṇa Viḷakkam. 907: commen.
空高イ 天国 ヲ (死後) 下サル 神 ヨ

Kōkkaḷ tōṟum miṇ vāḷ vīci. Tiruveṇkaik Kalampakam. 84

神ノ山ノ ソレゾレモ 光ノ 刃ヲ 差上ゲテ

Kō Thunderbolt [雷] Pinkalantai.

kō を含む kōṇ という言葉もある。

タミル語 kōṇ god, king

例。Ciri yēṇ piṇai poṇukkum Kōṇ ē. Tiruvāca. 5

ツマラヌ人間ノ私ノ 罪ヲ 許サム 神 ヨ

Tēvar Kōṇ pūṇ āram. Cilampu. 17 : 29 : 2

天国ノ 王ノ 飾リ物ノ 首輪

以上のような kō, kōṇ の意味を見ると、雷とか光とかを表わし、超能力を保つことの根源の意味が分る。それをふまえて kōmāṇ の例を見る。

例。Kōmāṇ paṇṭait toṇṭar oṭu … ālvāṇ. Tiruvāca. 45

神ハ 昔ノ 下僕 ト共ニ(天上・地上・地下ヲ) 治メテイル

Kōmāṇ niṇ tīruk kōyil tūkēṇ. Tiruvāca. 5

神ヨ アナタノ 尊イ オ社(ヤシロ)ヲ 掃除シマセンデシタ

Neṭun tērt teṇṇar kōmāṇ. Akam. 209 : 3

大キイ 馬車ニ(乗ル) 南ノ 王

日本語 kam-u > kam-i 雷、山、神、領有する王

例。雷：伊香保根(いかほね)にかみ(雷)な鳴りそね 万葉3421

山：伊夜彦神のふもとに(弥彦山ノフモトニ) 今日らもか鹿の伏すらむ

万葉3884

神：神の社(やしろ)に照る鏡倭文(しつ)に取り添へ乞ひ祈(の)みて

万葉4011

この山を領(うしは)く神 万葉1759

以上の例によって kōmāṇ と kamu とは、音韻上も意味上も対応すると見られる。

(9) タミル語 kuḷ-ir (DED1834)：日本語 kōr-u (凍る)、kōy-u (凍ゆ)

タミル語 kuḷ-ir to feel cold, chilly ; to get numbed as in death (冷たい。死んだように感覚を失っている)

例。Kuḷir koḷ vātai. Akam. 163 : 9

冷タク 吹ク 風

Kuḷir poykai aḷaru. Pari. 8 : 93

冷タイ 池ノ 泥

日本語 kōy-u 寒さにこごえる kōr-u 凍る

例。凍 コル 類聚名義抄

一人の人飢ゑ寒(コユル)ときは顧みて身を責む 仁徳紀7年

(10) タミル語 ōṅk-u (DED1033)：日本語 ag-arū (上がる) (o/a 対応)

タミル語 ōṅk-u to lift up, raise. [int.] to rise high, to be lofty. (昇る、上がる)

例。Uyāṅkiṇāl ōṅkirru uyir. Purapporuḷ 4 : 13

苦シンダ彼女ノ 昇天シタ 魂

日本語 ag-arū 上る、昇天する

例。名のあがらむこと 大鏡・頼忠

神あがり あがり (昇天) 給ひぬ 万葉167

(11) タミル語 **cūr-ai** (DEDR2744): 日本語 **sur-u** (奪う、スル)

タミル語 **cūr-ai** robbery, dacoity, pillage (強奪、略奪)

例. Āru eri paraiyum cūrai-c cuṇṇam um. Cilampu. 12 : 40

道デ タタク 太鼓モ 盗人ノ シルシ モ (見タラ分ル)

Cūrai kōl parai. Tol. Poruḷ 18 commen.

スリガ 集マッテイル トコロ

日本語 **sur-u** 強奪する、ひそかにすりをする

例. 一つは鷹のために奪 (す) られぬ 石山本金光明最勝王經10.平安後期

盗人スリ十人子一人等釜にて煮らる 言繼卿記 文禄三年八月

(12) タミル語 **cuv-al** (DEDR2696): 日本語 **sō>se** (背)

タミル語 **cuv-al** nape of the neck, upper part of the shoulder, back (うなじ、背)

例. Kuṛai cuval micai tātoṭu tāṛa. Kali. 56 : 4

髪ノ毛ガ 背中ノ 上ニ 花ト共ニ 落チテ

日本語 **sō** 背 (後世 **se** に転じた)

sōsisi 背傍肉曾志之 (ソシシ) 新撰字鏡

sōfira 背平 曾毗良 古事記上卷

sōmuku 背向く (背反する) 万葉196

(13) タミル語 **teḷ-i** (DEDR3433): 日本語 **sir-a, sir-o** (白)

タミル語 **teḷ-i** to become clear, to become white (白くなる)

例. Teḷ arip por cilampu. Maturaik. 444

白イ 真珠ヲハメタ 金ノ 足首飾リ

テルグ語にも **teḷi** white, pure がある。

日本語 **sir-a, sir-o** 白

sirakumo (白雲) sirasagi (白鷺) siratama (真珠) 万葉集に多数ある。

タミル語 **te** ~ 日本語 **si** の対応の例。

DEDR3419 **teri** (to know) ~ **siru** (知る)

DEDR3419 **teri** (to become evident) ~ **sirusi** (著し)

DEDR3446 **terru** (to weave, braid) ~ **situ** (倭文・旧式な織物)

DEDR3449 **tenral** (south wind) ~ **sidake** (東南風・群馬方言)

DEDR3457 **tēmpu** (to fade, wither) ~ **sibomu** (萎む)

(14) タミル語 **nāṭṭ-u** (DEDR3583): 日本語 **nas-u** (成す、生す)

タミル語 **nāṭṭ-u** to set up, to plant, to create (成す、創出する)

例. Nāṭṭutum yām ōr pāṭṭuṭaic ceyyūḷ. Cilampu. pati : 60

作り出ソウト思ウ。私ハ 一ツノ リズムノアル 詩ヲ

日本語 **nas-u** 子を産む、つくり出す

例。おのがなさぬ子なれば 竹取

水鳥のすだく水沼(みぬま)を都となしつ 万葉4261

タミル語 -tt- ~ 日本語 -s- の例。

DEDR1144 keṭṭi (to be clever) kasi-kosi (賢し)

DEDR2721 cūṭṭu (crown) ōsufi (冠) (語頭の c/s の脱落)

DEDR4495 poṭṭai (blindness) *posa > bosama (盲人)

DEDR4660 maṭṭu (measure) masu (杓)

DEDR5048 mūṭṭu (to kindle) mosu (燃す)

(15) タミル語 mūṭ-u (DEDR5034): 日本語 mus-u (隠す)

タミル語 mūṭ-u to cover, to hide, to shut in, enclose (隠す、覆う)

例。Mūṭiya neyyoṭu naravam murriya cāṭikaḷ. Kampa. Yutta. 51

蓋シテアル 油ト 蜂蜜ノ 一杯アル 樽

Mūṭu pal maṇic civikai. Tiruttonṭar: Tiruñācam. 1082

カブセテアル タクサンノ 珠ノ 籠

日本語 mus-u 隠す(方言)

musu 隠す、内密にする、ごまかす 秋田県、長野県

umusu // 秋田県鹿角郡、山形県北村山郡

omosu // 岩手県、宮城県、鳥取県西伯郡

(16) タミル語 maṭṭu

大野の一覧表には maṭṭu に指示のような意味の項目はない。

(17) タミル語 tamp-al (DEDR3083): 日本語 tamb-o (田んぼ)

タミル語 tamp-al については TL には “hardening of rice fields after heavy rain” とある。これは何のことか不明である。ところが別項に次の記述がある。

tampal-aṭi to plough a field after it has been hardened by rain (雨で固くなった耕地をたがやす)

tampal-āṭu to water a field and turn it soft and muddy by trampling (耕地に水を入れ、踏みつけて、柔らかく泥んこにする)

ここに見える āṭu という動詞は「遊ぶ」「音楽をする」などの意味だが、TL には wallow in (動物や人が、泥・砂・水の中をもがいて進む) という意味もある。従って tampalāṭu はいわゆるシロカキである。これを見れば tampal が泥田であることが分る。さらに TL の説明は農業関係に精しくないと書いたが、この tampal の項目はその一例である。

日本語 tamb-o たんぼ

従来の辞書は、語源の説明に窮して「田の面(も)」の約とするものが多い。タンボの例は江戸時代から見える。方言ではタンボ「ぬかるみ、泥田、水たまり、溜池、下水」などの意で西日本に極めて多い。ta(田)は tamp- の語尾の脱落と思われる。

(18) タミル語 tav-ir (DEDR3113): 日本語 tab-i (旅)

タミル語 tav-ir to stay, abide

例。Yār il taviṛntānai kūru. Kali. 84 : 9

誰ノ 家ニ 泊ッタ カ 言イナサイ [夫ニ向ッテノ妻ノ詰問]

日本語 tab-i 旅

現在では長期旅行もタビという。しかし、古代のタビの使い方を見ると、「しばしばたびなる所にあるに」(かげろう日記上)など、臨時のちょっとした滞在である。祭礼のとき神輿(みこし)が本宮から渡って仮りに鎮座するところを「たびの御社」という。タビは仮りの宿泊を意味していた。

(19) タミル語 vaṇṭ-al (DEDR5237): 日本語 wad-a (入江)

タミル語 vaṇṭ-al eearth washed ashore by a river, lake etc. (川や湖の岸)

例。Vaṇṭal nuṇ maṇal taḷḷi vaḷai kaikaḷ. Nācciyār. 2 : 3

岸ノ 細カイ 砂ノ 遊ビヲスル 腕輪ヲツケタ 手

Vaṇṭal pāy poṇṇi vaḷa nāṭaṇ. Kalinkattupparaṇi. 148

沖積地ヲ 流レル ポン川ノアル 豊カナ 国ノ人

日本語 wad-a 入江の岸、川辺の所

例。(吉野川の) 夢のわだ瀬とはならずて淵にあらぬかも 万葉335

ささなみの志賀の大わだ淀むとも 万葉31

(20) タミル語 nāṭṭ-u (DEDR3583): 日本語 nas-u (成す、生す)

この例は(14)と重複である。

(21) タミル語 nēr (DEDR3770): 日本語 nir-u (似る)

タミル語 nēr to resemble, equal (似る、同等である)

例。paitalam allōm … am kaṇṇiyai nērtal nām perinē.

悩ンダリ(私ハ) シナイ。 美シイ 眼ノ彼女ニ 似ルコトガ 私ニ デキルナラ

Aiṅk. 135 : 2

日本語 nir-u 似る

例。酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る 万葉344

(22) タミル語 piṇ-ai (DEDR4160): 日本語 fin-eru (捻る)

タミル語 piṇ-ai to entwine, conjoin, unite (からめる、巻きつける)

例。Kāṭalar kai piṇaintu āycciyar inpurru ayarvar.

恋人ノ 手先ヲ カラメテ 女タチガ 楽シク ダンスヲスル

Kali. 106 : 32

日本語 fin-eru 捻る、撚る(指先で物をつまみ、左または右にまわす)

例。撚は、両の指面を合はせ物を撚るそ 蘇悉地羯羅經略疏 寛平点

(23) タミル語 paṭ-u (DEDR3853): 日本語 fat-a (母親)

以下、(24)(25)(26)については語根 paṭ- の同類としてすでに扱った。(34)ページ参照。

(24) タミル語 paṭ-i (DEDR3848): 日本語 fat-u (泊つ)

タミル語 paṭ-i TL. to rest, as clouds upon a mountain (とまる、山にかかる、

雲が止まる、休む)

例。Turai. paṭ-i ampi. Aink. 168 : 2

港ニ トマル 舟

日本語 fat-u 泊つ、舟が停泊する

1. 島かげにわが舟はてて 万葉4412

2. さ夜ふけてわが舟はてむ泊り知らずも 万葉1732

(25) タミル語 paṭ-u (DEDR3853): 日本語 fat-u (初)

タミル語 paṭ-u についてはすでに述べたが、「初」に対応する例だけ特に記しておく。(TL. 1. to come to existence; to appear; to occur, happen; to blossom. [「生じる」「出現する」「起こる」「咲く」]。これは季節についていえば、ある季節の初めである。日本語では「はつ雪」「はつ花」のハツに当たる。その実例を掲げる。)

1. Uyar neṭuṇ kunram paṭu maṇai talaii. Aink. 371 : 2

高ク ツヅイタ 山ニ 初 雨ガ 降ッタ

2. Paṭu maṇai poṇṭa payamiku puravu. Akam. 154 : 1

初 雨ガ 降ッタ 収穫ノ豊カナ 丘陵地

3. Paṭu pul ōppal. Nar. 49 : 4

季節初メテノ 鳥 追イ (収穫期=作物=初メテ群ガル鳥ヲ追ウ)

日本語 fat-u 初 (季節の最初)

1. 君が家に植ゑたる萩の初花を 万葉4252

2. 九月 (ながつき) のそのはつ雁の使ひにも 万葉1614

3. 馬並めてはつ鳥狩 (とがり) だにせずや別れむ 万葉4249

(26) タミル語 paṭ-ukar (DEDR3856): 日本語 fat-akē (陸田、水田)

これについては(39・40)ページに書いた。

(27) タミル語 par-am (TL2499): 日本語 far-a (天の原)

タミル語 par-am heaven par-avai sea, ocean

param については TL はサンスクリット系の単語と認めている。そして Tiruvācakam から例をひいている。ところが paravai については TL は sea, ocean の訳をあげて、タミル語 para- からの派生語としている。これはおかしい扱いであって、(28) paravu の項に列挙したようにタミル語には par- という語根があり、それは、膨張・拡大・拡散・散亡という意味を持つ。その一つの派生として無限の拡大としての天空・大海が考えられる。paravai の同族として、param (天空) を扱ってよいと考える。このことを、Kothandaraman 教授に話したことがある。教授は par- を語根として把握することによって、多くのタミル語が一元的に理解できることに驚きと賛意を表明した。

日本語 far-a (原)、天の原、海原 (ウナハラ)

例。この語は古事記・万葉以下に多くの例がある。

ハラとは遠くまで広がった所をいう。

(28) タミル語 **par-avu** (DEDR3949): 日本語 **far-afu** (祓除する)

タミル語 **par-avu** これについて TL は、1. to lay open to view, as goods in a bazaar. 2. to say, declare. 3. to praise, extol. 4. to worship, reverence. 5. to sing. という訳語をかかげている。Kothandaraman 教授に大野は次の例をあげて、語根 **par-** と **far-** との対応があるという説明をした。

DEDR	タミル語	日本語
3972	par-u (大きくなる)	far-u (張る)
3972	par-u (ふくれる、腫れる)	far-u (腫る)
3949	par-avai (海)	far-a (原、海原)
3949	par-a (広くて平らな表面)	far-a (原)
3949	par-a (はるか遠い)	far-uka (遙か)
3962	par-i (切り離す、ばらばらにする)	far-ara (散るさま)
3949	par-a (雲や光が拡散する)	far-u (晴る、雲が拡散する)
3951	par-avu (罪障を消滅させる)	far-afu (祓除する)
TL 2503	par-avukaṭaṇ (祓えに差出すもの)	far-afēṭumōnō (祓物)
3970	par-iyam (支払い金)	far-afu (支払う)

語根 **par-** と **far-** との根本の意味は「ふくれあがって来て、ぎりぎりまでふくれると、拡散してバラバラに、雲散霧消してしまうこと。」そこから発展して「罪科や過失を雲散霧消させるべく、神に物を捧げ、神にたたえ言を述べてハラフこと」だと大野は述べた。語根を共有し、その語根が具体的な単語を形成した場合に生じる、音形と意味との対応例が、上表のように10例にのぼることは、二つの言語が語根の段階でしっかり組み合っていることを示すものである。

Kothandaraman 教授は言った。「自分はこのような語根が抽出されると考えたこともなかった。この考えによって **paravu** という動詞の根源的な意味がはじめて分かった。**paravu** は **spread** である。それがどうして **praise, extol** (賞賛する。賞揚する) になるのか心にかかっていた。神に **offer** し、**praise** して **guilt** を **sweep away** することを祈る。なるほど。」教授は TL をひろげてうなずいた。

また、この語根 **par-** の考えは、**paravai** (海)、**param** (天) の根源的な意味を理解するに役立つ。「**param** (天) はサンスクリットと考えられているが、**par-** の具体化と考えた方がいい」と教授は言った。

(29) タミル語 **par-i** (DEDR4027): 日本語 **far-u** (雑草を刈る、根を掘る)

タミル語 **par-i** TL. 1. to pluck, crop, pick off with a twist. 2. to weed, eradicate. 3. to dig, excavate. とある。雑草などを「ひっこぬく」「雑草を刈る」「掘り出す」である。

例。Cāy **parikka** nīr tikaṇṇam taṇṇavayal. Nālati. 389:1
草ヲ 刈り取ッタラ 水ガ ヨク見エル 水田

日本語 far-u 類聚名義抄に「墾」ハル、カヘス、オコス、ホルとある。土地を掘りおこすこと。万葉集2244に「住吉（スミノエ）の岸を田にハリ」、万葉集3447に「安努（あの）な行かむとハリし道」とある。開墾である。大野の500語の表は対応語の Index にすぎず、訳語は、その見出しである。だから説明が不備なことはやむを得ない。far-u は、土地を掘りおこして、きりひらくことである。

(30) タミル語 parr-u (DEDR4034): 日本語 far-u (貼る)

タミル語 parr-u 名詞として 1. solder, paste, glue. 2. particles of boiled rice adhering to the cooking pot. 3. plaster, poultice. [「ハンダ」「糊」「にかわ」「ナベにつく炊き御飯のねばねば」「漆喰」]。

タミル語では、動詞・名詞・副詞が形式的に厳密に区別されていなかったことを考えれば、タミル語の名詞が、日本語では動詞として使われることは差支えない。

日本語 far-u 貼る。

例。朴（ほほ）に紫の紙はりたる扇 枕草子36

(31) タミル語 pāv-u (DEDR4088): 日本語 faf-u (這ふ)

タミル語 pāv-u 1. to extend. 2. to be diffused or pervade. 3. to spread, as creepers on the ground. 「広がる」「拡散する」「蔓草が地上に広がる」意である。

例。Pāvu taṇ punal. Tēvāram : Cuntarar. 48-3

広ガル 冷タイ 川ノ水（洪水ノ様子）

日本語 faf-u 蔓草が一面に広がる。生物が物の表面を動きまわる。

1. 谷狭（せま）み峯にはひたる山かづら 万葉3506

2. はふ葛（くず）のいや遠永く 万葉423

万葉の二例は蔓草が一面に広がって生えるさまで、まさしくタミル語の pāvu に当たる。Tēvāram の例は、洪水の水が一面に広がること。日本語「這ふ」は現代語では子供などが這うことをいう。枕草子にも「急ぎてはひ来る」とある。しかし枕草子にも「荒れたる家にむぐらはひかりたる」とある。「むぐら」とは蔓でからむ雑草の総称である。タミル語の用法と全く一致する。

(32) タミル語 pokk-aṇai (DEDR4452): 日本語 fak-a (墓)

これについては(18)ページに述べた。

(33) タミル語 pitt-ai (DEDR4168): 日本語 fit-afi (前髪)

タミル語 pitt-ai lock of hair (毛髪の束)

pittai は額の髪の前につける花輪でもある。それに対して日本語の fitafi は現在では「額」で、これは昔は nuka といった部分である。鎌倉時代の漢和辞典・類聚名義抄に「蔽髪ヒタヒ」とある。「容飾具」とあるのは、タミル語の「額につける花輪」(Kothandaraman 教授による)と対応している。ヒタヒが「髪」であったことは新古今集1712の歌の題詞に「ひたひを奉る」とあり、そのヒタヒは1713の歌に「返し奉り給ふ」「老いて帰れる髪のつれなさ」とある。これは、後に立ったとき差上げた髪（ヒタヒ）が、後の出家によって不要となったので返されて来たもの

を指している。つまり、ヒタヒは「髪」でもあったことがこれで分る。

- (34)・(35) タミル語 **pin** (DEDR4205): 日本語 **fin-a**, **wina-ka**, **fin-e** (鄙、田舎、古)
 タミル語 **pin** back, rear part, end as in place or time (背後、時と場所のうしろ)

pin after, afterwards (後、後で)

pin-tu to be inferior, be tardy (劣る、遅れる)

例。Mun iyaṅku ūrti pinṇilai iyātu. Akam. 44 : 5

前ニ 進メ 戦車ヨ。[車ノ] 後ニ [他ノ車ヲ] 続カセルナ

Pinpu ... maṇaiyōḷ pāṇar ārttu. Puraṁ. 334 : 4

後デ 妻ハ 笛吹キニ 食物ヲ与エタ

日本語 **fin-a** 夷 (ひな) 天さかる夷に五年住まひつつ 万葉880

win-aka 田舎 タミル語 **p-** は日本語 **w-** とも対応する。

ka は所の意。従って **wina-ka** は価値劣る所の意。

fin-e 古 ふるきものをひねと名づく 名語記六

晩稻 比禰 (ひね) 和名抄

- (36) タミル語 **put-ai** (DEDR4509): 日本語 **fut-a** (蓋) **fut-agu** (塞ぐ)

タミル語 **put-ai** to bury, to close, cover (埋める、ふさぐ)

例。Muyāṅkal viruppoṭu mukam putai tirappa. Akam. 86 : 23

抱擁 シタクテ [彼女ノ] 顔ノ 蔽イヲ [私ハ] 開イタ

日本語 **fut-a** 蓋 **fut-agu** 塞ぐ

例。櫛の箱のふた 源氏・手習

[姫の] 逃げて入る袖をとらへ給へば面をふたぎて候へど 竹取

- (37) タミル語 **puṛ-ai** (DEDR4317): 日本語 **för-a** 洞穴

タミル語 **puṛ-ai** hole, tube (穴、管)

例。Kal atar arum puṛai alki kāṇavaṇ. Nar. 336 : 3

山ノ 道ノ 小サイ 窟(ホラ)ニ 身ヲヒソメテイル 狩人

日本語 **för-a** 岩にある穴。窟 ホラ 類聚名義抄

谷 谿 保良 新撰字鏡

- (38) タミル語 **vākk-u** (DEDR5334): 日本語 **fak-u** (吐く)

タミル語 **vākk-u** to pour ; mouth, the organ of speech, word, speech (口から出す、口)

vākku とは、発音器官としての口であり、そこから出る言葉であり、発話であり、また口から外に出すことである。

例。Aṭar por cirakattāl vākki. Kali. 51 : 7

輝ク 金ノ 壺カラ [酒ヲ] 注イダ

Mātavi taṇ vākkīṇal āṭaraṅkil vantu. Cilampu. 3

マータビハ 彼女ノ 言葉ニヨッテ 劇場ニ ヤッテ来タ

日本語 fak-u 吐く（現在では胃の中のものを吐く意に多く使うが、昔は言葉に使った）

例。唾を吐きて曰はく

地藏十輪經元慶七年点

まことに富樓那（ふるな）の弁説をはきて

古今著聞集

我も我もと才覚をはきつつさだめ申しける

愚管抄4-1

広言をハク（大言壮語する）

日葡辞書

(39) タミル語 kāv-al (DEDR1416): 日本語 kab-afu (庇ふ)

タミル語 kāv-al to guard, defend (DEDR には名詞としての意味しかあげてない。動詞としての意味は省かれている)

例. Kuravar maṭamakal ēṇal kāval āyinaḷ. Nar. 102:9

狩人ノ 若イ娘ガ 粟畑ヲ 守ルヨウニ ナッタ

Viyaḷ nakar tuñcāk kāvalar. Nar. 98:9

広イ 町ヲ 眠ラズニ 守ル人々

日本語 kab-afu 庇ふ、かばう、保護する

例。誰をかばはんとて軍をばし給ふぞ 平家物語・法住寺合戦

(40) タミル語 mak-iṭi (DEDR4617): 日本語 mak-u (巻く、負く)

タミル語 mak-iṭi to be overturned

カンナダ語 mag-uṛ to turned, be turned, retreat

DEDR4617 には、タミル語の語釈は非常に簡単であるが、カンナダ語、コタ語、ツル語以下、極めて多くの言語に turn back とか role over という訳がある。

日本語 mak-u は四段活用巻くがあり、下二段活用に負くがある。名義抄のアクセントを見ると、共に第一アクセントは上である。これは同源の可能性を示唆する。

マク（上平） 負（仏下本17）

マク（上平） 纏（法中125）

以上の所見から、タミル語 makiṭi と日本語 maku とが関係があると推測した。ところが、タミル語 makiṭi は用例の極めて少ない語のようであるし、日本語 maku には、種々の語義がある。タミル語 makiṭi の用例を具体的に数多く得た上で論定すべきだろう。

(41) タミル語 muc-i (DEDR4903): 日本語 mus-iru (撈る)

タミル語 muc-i to wrench, twist (ねじりとる、ねじる)

例. Muṭittalai mucittu. Kamparā. Poṇṭirū.7

髪ヲ結ッタ首ヲ ネジリ取ッテ

日本語 mus-iru ひねり取る、もぎとる

例。その鳥をとらへて毛をつるりとむしりてけり 古今著聞集563

ハナラムシル、クサラムシル、ケラムシル

日葡辞書

(42) タミル語 muṭṭ-u (DEDR4932): 日本語 *mut-u > but-u (打つ)

タミル語 muṭṭ-u to butt against, to assault (ぶつかる、殴打する)

例。Mutir tēm paṛampakai muṭṭinum muṭṭum. Cilampu. 10 : 73
 ヨク熟シタ 甘イ 果物が敵ヲ 打ツヨウニ (落チテ) ブツカルダロウ
 Tullit tūṇ muṭṭumām kīr. Nālaṭi. 64 : 4
 フルエテ 柱ヲ 打ッテイル 下層ノ人々

日本語 but-u 打つ (ブツは勢いをこめてブツカル。ウツは puṭai で太鼓をウツ、
 鐘をウツなどに使い、区別がある)

例。それぶてたたけ 浄瑠璃 出世景清
 食はすこぶしを請けはずしてぶちかへしたたき合ひ 女殺油地獄

(43) タミル語 **muḷ** (DEDR4995) : 日本語 ***mōr-i > mor-i** (鉋)

タミル語 muḷ thorn, anything sharp and pointed, goad, spur (いばら、鋭く尖ったもの何でも、突き棒)

例。Kavai muḷ karuviyiṇ ... moṛi payirri. Mullaip. 35
 フォーク形ノ 鋭イ棒ノ 道具デ (象ニ) 言葉ヲ 教エタ

日本語 mor-i (鉋)

例。イチノモリ 鯨を捕る時に打ち込む第一番目の鉋。 日葡辞書
 ニノモリ 第二番目の鉋 日葡辞書
 魚粽モリ 刺魚具 書言字考節用集

(44) タミル語 **mūṭ-u** (DEDR5034) : 日本語 **mutu-ki** (襦袢)

タミル語 mūṭ-u to cover, shroud, veil ; to hide, to shut as the mouth, to surround (覆う、死衣をかぶせる、隠す、口をとじる、取り巻く)

例。Mūṭit tikkonṭu eṇuvar. Nālaṭi. 24 : 3
 (死者ニ) 衣ヲカブセテ 火ヲ持ッテ (墓地ヲ) 行ク

日本語 mutu-ki 幼児に着せる衣 (mut-u、カブセル) (ki、着衣)

例。襦袢響保二音。和名無豆岐 (ムツキ) 小兒被也 和名抄
 襦袢ムツギ孩児の為に不潔を拭ふ者也 文明本節用集

(45) タミル語 **am-iṛ** (DEDR167) : 日本語 **am-u, ab-iru** (浴む、浴びる)

タミル語 am-iṛ to be immersed, plunged ; to sink (潜水する、水に飛び込む)

例。Inpak kaṭal ūṭe amiṛuvēṇai ... Tiruppakaṛ. 78
 飲ビノ 海ノ 内ニ 沈ンダ私ヲ (助ケテ下サイ)

日本語 am-u, ab-iru 浴む、浴びる、湯や川の水にひたって洗う

例。浴 ユアム 名義抄
 淹 アム、ヒタス 名義抄 (水にひたす)
 沐浴 アム、ヒタス、アラフ 名義抄 (水にひたす)

amir は水に没することであるが、日本語の amu は bathe の意味で多少相違がある。しかし、日本語に同じ語根の am-a 海女がある。海女は海水に没して魚介をとることを業としている。これは am-iṛ と対応する。そこで、

am-ir to immerse : am-a a diver to get fishes or shells
am-u to bathe, put into water

という対応が考えられる。

(46) タミル語 im (DEDR540): 日本語 im-i (忌み)

タミル語 im place for cremation of the dead, burial ground (火葬場、埋葬地)
(これらは当然、平素立ち入り忌避の場所である)

im-am burning ground, funeral pyre (焼き場、火葬の燃料)

例. Karuṅkōṭṭu imam Puram. 246:11

黒イ木ノ 柩

日本語 im-i ①忌み。死の穢れ。穢れの期間(不浄として人々と交渉を断つ期間)
(死ンダ) 御息所のいみ果てぬれば 源氏夕霧

②血の穢れ(出産、月経など)

産のいみいく日にて候ふぞ 和語燈録五

山下氏の注に「墓地、不浄の地」とあり、不浄の地が問題としてある。しかしタミル語の「火葬場」とか、「墓地」とか、あるいは「柩」とかについて、日本語の「忌ミ」「忌マ忌マシ」を含めて (pollution of the dead) (穢れ、忌み) を対応と認めることが何故問題となるのか不明である。

(47) タミル語 ac-ai (DEDR39, TL34): 日本語 yas-u (痩す)

タミル語 ac-ai to diminish (小さくなる、細くする); slender, thin, slim (痩せた、細い)

āc-u trifle, anything small or mean; minuteness, fineness, acuteness
(些少な、何でも小さいもの: こまかいもの、鋭いもの)
slender (痩せた、ほっそりした)

例. Tirukkural に acaiyaṅku 1098 があり、「痩せた女性に」と訳される。

Acaiya karuṅkāḷ veṇ Kuruku. Kuru. 303:1

ヤセタ 黒イ脚ノ 白イ 鶴

日本語 yas-u 痩す

例. 夏やせによしといふものぞ 万葉3853

夜昼といはず思ふにしわが身はやせぬ 万葉723

(48)の ā, a: ya の対応を参照。

(48) タミル語 aṇ-ai (DEDR122): 日本語 yan-a (堤、土手) (築くやな)

タミル語 aṇ-ai embankment, dam; bank of a river; causeway (うね、川の堤防、土手道)

例. Āy katir nellin varampu aṇai. Kuru. 238:2

小サイ 穂ノ 稲ノ 境界ノ アゼ

日本語 yan-a 堤、土手 方言 千葉県、神奈川県

アゼ道 方言 千葉県安房郡

yan-a 築 (川の流れをせき止めて中央だけ水が流れるようにして、そこに材木を並べて魚がその台の上に残るのを取る設備)

例。築 これをば椰奈 (やな) といふ 書紀神武即位前

あだ人の八名 (やな) 打ちわたす瀬を早み 万葉2699

魚をとる設備のヤナの図を描いて Sanmugadas 教授、Kothandaraman 教授に示したところ、二人とも、「全くそのとおりだ」とのことだった。

大野はタミル語 a~日本語 ya という音韻の対応があると認めている。これについて多少説明しておこう。もともとドラヴィダ語には yā→ā, ē という音韻の変化があった。それを図示すれば、次のようなものである。

古典タミル語	タミル語	DEDR	カンナダ語	テルグ語	意 味
yā	ā	5149			to bind (結ぶ)
yātu	ātu	5152	āḍu		goat (山羊)
yāṇtu	āṇtu	5153	ēḍu	āṇḍu	year (年)
yāmai	āmai	5155	āme	tāmēlu	tortoise (亀)
yāl	āl	5157	ālu	ēlu	to rule (治める)
yāli	āli	5158			lion (獅子)
yāru	āru	5159		ēru	river (川)
yānai	ānai	5161	ān-e	ēnika	elephant (象)
yār	ār	5151	ār	ēru	who (誰)
yāvaṇ	ēvaṇ	5151			who (誰)
yāṇkaṇ	ēṇkaṇ	5151			where (何処)
yār	ēru	5156			musical instrument (楽器)
yāṇ	ēṇavaṇ	5160		ēnu	I (私)

この事実はつとに注目されており、T. P. Meenakshisundaran 教授なども、その由来について自説を展開している (“A History of Tamil Language” <Poona. 1965>)。日本語に関係する例としては次のものがある。

現代タミル語 古典タミル語 日本語
āru yāru (川) yara [万葉集3878]

日本語の yara は万葉集自体には海底にあたるような記述があるが、なお多くの説があり、諸説紛々という状態である。タミル語との対応を考えて「川」とすることができそうである。

上表のように、タミル語の古語 yā における y の脱落、そして ā, ē への変化を考慮に加えると、次の対応表が作られる。

(DEDR) (意味) タミル語 推定古典タミル語 日本語
① 371 (sharp stick) ār *yār yari (槍)

341 (slender)	āc-u	*yāc-u	yasu (痩す)
TL242 (spoke)	ār-am	*yār-	ya (輻)
369 (to put on)	ār	*yār	yöröfu (鎧ふ) (a/ö 交替)
805 (arrow)	ē	*yā	ya (矢)
870 (increase)	ē	*yā	ya (弥)
TL551 (particle)	ē	*yā	ya (助詞ヤ)
738 (eight)	eṭṭu	*yā	ya (8)
<hr/>			
㊦ 7 (house)	akam		yaka (家)
122 (embankment)	aṇai		yana (堤、築)
161 (to cease)	amar		yamu (息む、止む)
TL 18 (to burn)	akai		yaku (焼く)

つまりここに挙げた ā または ē で始まっている形は、古典時代以前のタミル語では yā の形だったろうと推定できる。それを日本語と比較すると、その ā または ē は日本では ya で実現している。この㉓のグループを Kothandaraman 教授はよしとして賛意を表明された。大野は ā が a で実現される場合として㉔のグループを設定した。㉔については Kothandaraman 教授は、証拠が不足だという判断を示した。yā→ā, ē は長母音だという一つの証拠がある。しかし a の短母音ひとつではその由来には種々の可能性があるから、㉔については留保ということだった。しかし前ページの図表に見るように短母音 e で始まる enkaṇ, eṇu, enavaṇ の e は yānkaṇ, yār, yān という古典語の yā に対応している。これと平行して㉔のグループの a- が yā に対応することはあり得たと大野は思う。この4例が揃ってこうした平行現象を呈することを偶然とは考えにくい。

(49) タミル語 āṛ (DEDR371): 日本語 yar-i (槍)

タミル語 āṛ sharpness, pointedness

クルク語 āṛ-ci goad, pointed end of goad (Hern.), point of lance or stick
(突き棒、その尖頭、槍または棒の先)

例. Nākkattu āṛ eyru aṇuntiṇar. Cilampu. 5: 124

蛇ノ 尖鋭ナ 齒デ 嚙マレタ人

(タミル語の中で、突き棒の例をまだ得ていない。しかしクルク語にある同根の ārci は、まさしく日本の槍に相当する)

日本語 yar-i 槍

例. 槍七十四柄 正倉院文書、天平10年、但馬国正税帳

ヤリデヒトヲツク 日葡辞書

鎧 ヤリ 文明本節用集

(タミル語 ā, ē, a, e と日本語 ya との対応については(48)を参照)

(50) タミル語 āṛ (DEDR369): 日本語 *yar-afu > yör-öfu (鎧ふ) (a/ö の交替)

タミル語 āṛ to wear, put on; to bind, gird (着用する、剣などを帯びる)

例. Arai āṛ kōvaṇa ātaiyaṇ Tēvā. 5 : 167. 7

腰ニ 巻キツケタ フンドシヲ 着物ニシテイル人

日本語 yōr-ōfu 鎧ふ

例. 大和には群山あれども 取りよろふ天の香具山 登り立ち国見をすれば

(大和ノ国ニハ山々ガアルケレドモ、ソレヲ自分ノ身ノマワリニメグラシテイ
ル天ノ香具山ニ登ッテ国見ヲスルト) 万葉2

太上天皇の御身としてたちまちに甲冑をよろひ給ふことは先例承り及び候はず

保元上 新院御所各門々固めのこと

(ā と ya との対応については(48)を参照)

- (51) タミル語 vaṭ-am (DEDR5220) : 日本語 was-a (輪)、wa (輪) (t/s の対応)

タミル語 vaṭ-am a rope, a loop of coir rope, chains of a necklace (綱、ココヤ
シの外皮の繊維の輪、首飾りの輪)

例. Vaṭam koḷ maṇi ūcal mēl iriī. Cilampu. 29 : 23

太綱デ 作ッタ 美シイ ブランコ ニ ノッタ

日本語 was-a Vasa 鳥などを捕るために仕掛ける輪縄 [引くとしまる輪結び]。

日葡辞書

was-a 紐の輪 方言：和歌山、徳島、愛媛、高知、岡山、鳥取、福岡

- (52) タミル語 vaṇṭ-al (DEDR5237) : 日本語 wad-a (入江)

これは(19)の重複である。

- (53) タミル語 var-al (DEDR5320) : 日本語 war-a (藁)

タミル語 var-al drying up; dried twig. (乾燥：乾燥した小枝)

マラヤラム語 var-aṭu dry grass, hay, straw (乾いた草、乾草、わら)

例. Enrūr vāṭu varal. Puram. 75

夏ニ 乾シタ ワラ (川草) (籠ヲツクル)

日本語 war-a 藁 (わら)

例. 直土 (ひたつち) にわら解き敷きて 万葉892

藁 ワラ 名義抄

以上が山下氏の「問題の語と語義」に挙げられた53語(実質は50語)についての太野の資料である。何が問題なのか不明なものが多い。何の問題もないと見えるものも少なくない。回答が要求を満たしていないこともあるかと思うが、問題点は何であれ、対応語として扱った根拠の大略を示した。これで不足とあればいつでもその点を一層精しく説明したい。

以上の53語のうち、対応語と認めるのは誤りだと判断されるものはいくつあるか。それは500語の何パーセントに当たるか。太野にはもしあっても極めて少ないように思われるが、山下氏の再考ならびに第三者の判定を待つものである。

[注1] 大野晋：日本語とタミル語の関係 (144) —— 批評に対するお答え。安本美典氏へ——

「解釈と鑑賞」1994年1月号

大野晋：日本語とタミル語の関係 (145) —— 批評に対するお答え。小泉保氏、松本克己氏へ——「解釈と鑑賞」1994年2月号

松本克己：日本語・タミル語同系説に対する言語学的検証——大野晋氏へのお答えにかえて——「解釈と鑑賞」1994年5月号

大野晋：日本語とタミル語の関係 (148) —— 松本克己氏のお返事に対して——「解釈と鑑賞」1994年5月号

[注2] その全文は『シンポジウム弥生文化と日本語』（角川書店、1990年刊）に収められている。

[後記]

「日本研究」13号に、長田・家本・児玉・山下四氏の文章が載っているという噂を耳にしたのは今年の四月の中旬のことであった。そこでセンターに向って小生にも一部頂きたいと申し入れ、反論を執筆するつもりがある旨を申し上げた。一ヶ月ほど経て五月中旬に一部頂いたときに、「50枚以内で」書いてよいとあった。しかし四氏は合計300枚分書いておいでなので、せめて、その半分の150枚書かせて頂きたいと御連絡した。五月の末に承諾の御返事を頂いた。ただし六月末日締切厳守ということであった。そこで長田氏の序論に対するところから書き始めてみると、予想外に紙数を費やしている。鈴木貞美さんに御連絡したところ、「とにかく締切を守って下されば」という御好意に満ちたお話だった。

次に山下氏の分に対して書いているうちに、見る見る超過が大きくなった。随分割りもしたけれども、結局、御覧のような分量になり、全く家本氏と児玉氏の分を入れることはできなくなった。長田氏の序論は、四氏の見解を代表しているような面もあり、家本氏のサンスクリット語の問題、児玉氏の母音の対応の問題などは部分的にはそこに含まれている。だから今回は、ここまでにして、家本氏・児玉氏に対する分と長田氏の本論については改めて次の機会を待つほか仕方がないと思うに至った。以上大野がこの論文を書いた成りゆきを簡単に記して三氏に対するお詫びに代えさせて頂く次第である（1996年6月29日）。